

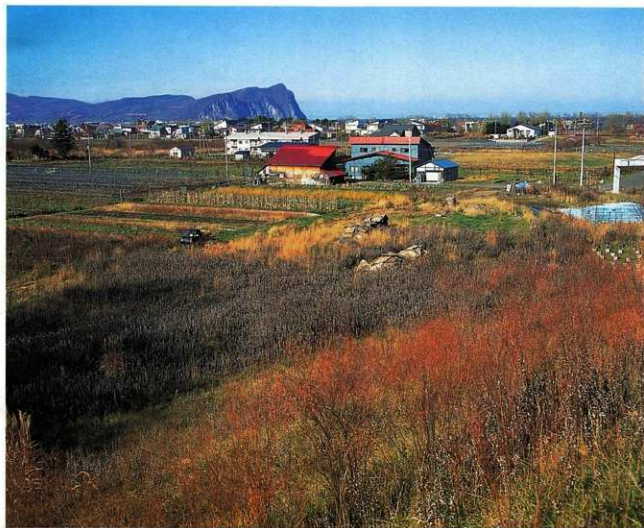
余市町

大谷地貝塚

遺跡発掘事前総合調査報告書

1998. 3

北海道余市町教育委員会



大谷地貝塚遺跡全景



余市式土器 (SM-1 出土)



空から見た大谷地貝塚



貝塚（SM-1）の全景



貝塚出土の土器（SM-1）



貝塚出土の骨角器 (SM-1)



貝塚出土のコタマガイ (SM-1)



貝塚出土の土器（SM-1）



堅穴住居跡出土の土器（H-1）



トレンチ状況 (10トレンチ)



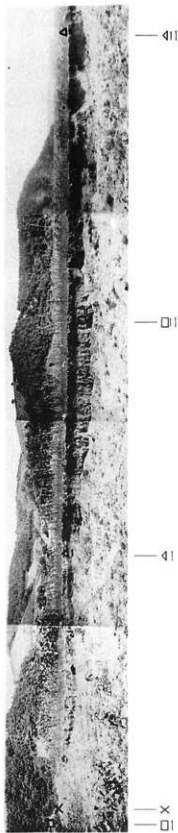
第Ⅲ群土器



第Ⅱ群土器 (19トレンチ出土)



剥片 (フレイク) 類 (36トレンチ出土)



解説

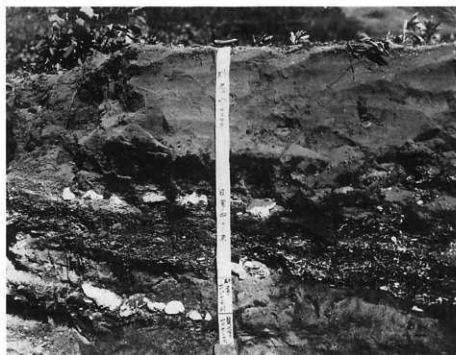
X 貝塚 発掘場所

□ 竪穴 石斧六本出土所

△ 竪穴所在地 大正12.3年頃は石鏃、石槍など時に見えた

向って左に高丘が見える、貝塚はこれから突出た半島上にあった

大谷地貝塚全景 (五十嵐 鑑「大谷地貝塚之層位的研究」より)



大谷地貝塚の状況（五十嵐 鐵『大谷地貝塚之層位的研究』より）

序 文

余市町は北海道の南西、積丹半島の基部に位置し、北は日本海に面し、三方をゆるやかな丘陵に囲まれた、人口約24,000人の町です。

余市町は、比較的気候が温暖なことで知られ、また海の幸、山の幸にも恵まれていることから、北海道内では早くから人が定住し、生活を営んでいました。この歴史を物語るように文化財も豊富に所在し、国指定史跡フゴツベ洞窟、国指定重要文化財・史跡旧下ヨイチ運上家、国指定史跡旧余市福原漁場の3件の国指定文化財を始め、北海道指定文化財2件、余市町指定文化財33件にのほっています。さらに埋蔵文化財についても、60箇所を超える周知の包蔵地が所在し、多くの遺構、遺物が発掘されています。

今回の発掘調査は、「遺跡発掘事前総合調査」として文化庁、北海道の補助を頂き、周知の包蔵地である大谷地貝塚遺跡で実施したものです。この遺跡は、大正年間から研究者の間で調査が行われ、日本海側では数少ない貝塚のある遺跡として、さらには余市式土器の名とともに、全国的にも知られています。

発掘に至る経過及びその結果については本文に述べられていますが、今回の詳細分布調査により、多くの遺構・遺物が検出され、予想以上に良好な状態で遺跡が残されていることが判明致しました。学術的にも貴重な遺跡であることから、今後は国指定文化財としての位置づけを含め文化庁、北海道教育委員会とも協議の上、大谷地貝塚遺跡の保存・活用を図って参りたいと考えています。さらに、埋蔵文化財への関心が高まりを見せている中で、この遺跡の価値を広く地域の方々に紹介すべく啓蒙に務め、もって文化財保護活動の一助といたしたいと思います。

今回の調査にあたりましては文化庁、北海道教育委員会を始めとする関係各位から種々のご指導をいただきました。また、土地所有者の皆様のご理解、発掘作業にあたられた皆様のご努力、さらには発掘調査に深い関心を寄せられました地域の皆様のご支援等多くの方々のご協力により、成果をあげることができました。ここに衷心より感謝を申し上げ、大谷地貝塚遺跡調査報告書刊行にあたっての序文といたします。

平成10年3月

北海道余市町教育委員会

教育長 笹山 義孝

例 言

- 1、本書は、平成9年度に行われた大谷地貝塚遺跡発掘事前総合調査の報告書である。
- 2、本遺跡は北海道余市郡余市町栄町456・458、登町64・7～74番地に所在する。
- 3、本書は、第1章を盛昭史、他は乾芳宏が執筆した。
- 4、各種分析、同定には次の方に執筆及び協力を依頼した。

動物遺体	西本豊弘(国立歴史民俗博物館助教授)
貝魚類遺体	新美倫子(名古屋大学大学院人間情報学研究所助手)
樹木	三野紀雄(北海道開拓記念館主任学芸員)
種子	椿坂恭代(北海道大学埋蔵文化財調査室講師)
石質	高橋興世(黒松内町ブナセンター学芸員)
- 5、遺構の写真撮影、遺物の写真撮影は今和明が行った。
- 6、各種、遺物の実測、拓本は、大倉智美、中村麻美、小黒照子、石器実測は、松永高由、吉野葉子が行った。
- 7、調査及び整理体制

平成9年度 第一次調査

調査期間 平成9年5月12日～7月31日

調査面積 914㎡

調査担当者 乾 芳宏

調査補助員 浅野敏昭

作業員 石川陽介、今和明、菅原勇悦、谷村邦彦、寺岡重幸、阿部栄子、内田豊子、大倉智美、小黒照子、北川千登世、田中初美、中村麻美、渡部優喜子

平成9年度 第二次調査

調査期間 平成9年11月1日～11月30日

調査面積 205㎡

調査担当者 乾芳宏

調査補助員 浅野敏昭

作業員 石川陽介、今和明、菅原勇悦、寺岡重幸、内田豊子、水田るり子、大倉智美、中村麻美

平成9年度 整理

整理員 阿部正徳、竹内栄佐、松永高田、内田豊子、大倉智美、小黒照子、富岡昭子、富本郁子、中村麻美、芳賀康子、水田るり子、吉野葉子

- 8、発掘調査及び整理作業には次の方々の指導、助言、協力を得た。記して感謝の意を表するしだいです。

文化庁 岡村道雄、国立歴史民俗博物館 西本豊弘、名古屋大学 新美倫子、北海道大学 林 謙作、北海道大学埋蔵文化財調査室 椿坂恭代、北海道教育委員会 木村尚俊・大沼忠春・種市幸生・田才雅彦・西脇対名夫・藤原秀樹、北海道開拓の村 野

村崇、北海道開拓記念館 三野紀雄、石狩市教育委員会 石橋孝夫・工藤義衛、常呂町教育委員会 武田 修、紋別市郷土館 佐藤和利、札幌市教育委員会 加藤邦雄・羽賀憲二、小樽市教育委員会 石川直章・青木 誠、小樽市博物館 石神 敏、虻田町教育委員会 角田隆志、伊達市教育委員会 青野友哉、函館市教育委員会 佐藤智雄、仁木町教育委員会 嶋井康夫、泊村教育委員会遺跡調査員 田部 淳・小柳太一・小柳リラコ、北海道地下資源研究所 濱田誠一、青木延広、前田克己、仲鉢 浩、宮 宏明、前田貞子

凡 例

- 1、遺構の平面及び本文中で使用した略称は下記の通りである。
竪穴住居跡 H (House)、土坑 P (Pit)、貝塚 SM (Shell Mound)、
炉跡 F (Fire)、石器集中跡 S (Stone)
- 2、挿図の縮尺については基本的に下記の通りであるが、他についてはスケールを入れて示した。
遺構関係 竪穴住居跡 1/40 発掘区セクション 1/40
遺物関係 土器 1/4 拓本 1/3 剥片石器・剥片 1/2
- 3、写真図版の縮尺及び現場写真は任意である。
- 4、第1図は、国土地理院発行の5万分の1図を使用した。
- 5、遺物記号は下記の通りである。
● 土器 ▲ 石器及び剥片 △ 骨角器

口 絵 目 次

- 口 絵 1 大谷地貝塚遺跡全景
口 絵 2 余市式土器 (SM-1 出土)
口 絵 3 空から見た大谷地貝塚
口 絵 4 貝塚 (SM-1) の全景・貝塚出土の土器 (SM-1)
口 絵 5 貝塚出土の骨角器 (SM-1) ・貝塚のコタマガイ (SM-1)
口 絵 6 貝塚出土の土器 (SM-1) ・堅穴住居跡出土の土器 (H-1)
口 絵 7 トレンチ状況 (10トレンチ) ・第Ⅲ群土器・第Ⅱ群土器 (19トレンチ)
剃片 (フレイク) 類 (36トレンチ出土)
口 絵 8 大谷地貝塚全景 (五十嵐鐵『大谷地貝塚之層位的研究』より)
口 絵 9 大谷地貝塚の状況 (五十嵐鐵『大谷地貝塚之層位的研究』より)

図 版 目 次

第 1 図版	トレンチ状況 (第 6 トレンチ)	96
第 2 図版	トレンチ状況 (上: 第 9 トレンチ 下: 11 トレンチ)	97
第 3 図版	調査風景と貝塚	98
第 4 図版	調査風景	99
第 5 図版	貝塚 (第 20 トレンチ SM-1) 状況	100
第 6 図版	貝塚 (第 20 トレンチ SM-1) 状況	101
第 7 図版	遺物の出土状況 (1)	102
第 8 図版	遺物の出土状況 (2)	103
第 9 図版	遺物の出土状況 (3)	104
第 10 図版	遺物の出土状況 (4)	105
第 11 図版	貝塚出土の遺物 (SM-1)	106
第 12 図版	包含層出土の遺物 (第Ⅰ・Ⅱ群土器)	107
第 13 図版	包含層出土の遺物 (Ⅱ群土器)	108
第 14 図版	包含層出土の遺物 (Ⅱ・Ⅲ群土器)	109
第 15 図版	包含層および表土出土の土器 (Ⅲ・Ⅳ群土器)	110
第 16 図版	包含層および表土出土の土器 (Ⅱ群底部Ⅳ・Ⅴ群)	111
第 17 図版	包含層出土の石器 (石鏃・石槍・スクレイパー・石斧・砥石)	112
第 18 図版	動物遺体 1 ・貝類	113
第 19 図版	動物遺体 2 ・哺乳類	114

大谷地貝塚 挿図目次

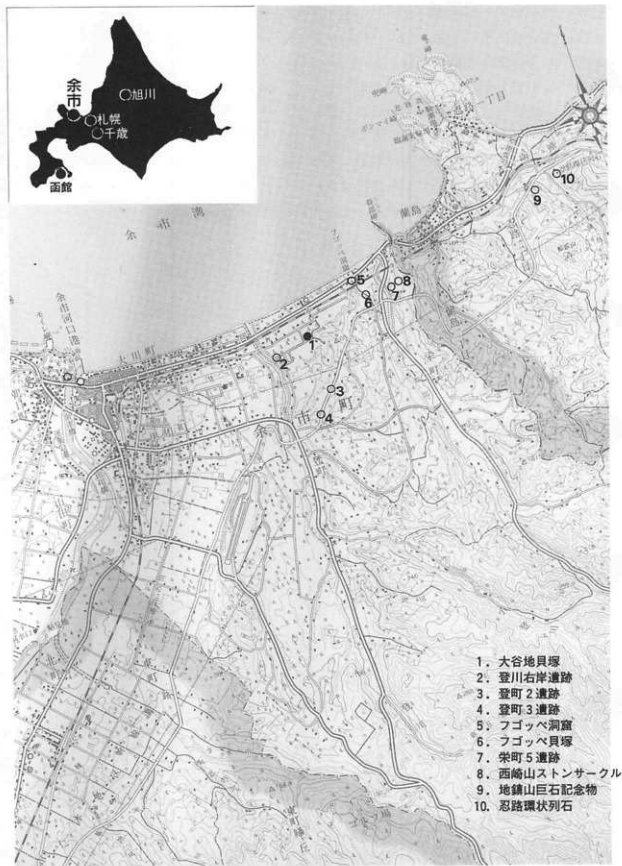
第1図	遺跡位置図	7
第2図	遺跡周辺図	9
第3図	『北海道人類学雑誌』大正8年	11
第4図	大谷地貝塚出土の遺物	12
第5図	大谷地貝塚出土の遺物	13
第6図	『大谷地貝塚之層位的研究』昭和9年	16
第7図	北海道土器形式変遷模式図	17
第8図	大谷地貝塚周辺の古地図(明治29年陸地測量部)	20
第9図	大谷地貝塚周辺の地質図(文献1に加筆)	21
第10図	発掘調査区	22
第11図	調査区とトレンチ	23
第12図	砂丘断面図	24
第13図	土層柱状図	24
第14図	土層断面図	25
第15図	土層断面図	26
第16図	土層断面図	27
第17図	遺構の配置図	29
第18図	遺構の平面図および土層断面図	37
第19図	遺構配置と土層断面図	38
第20図	貝塚(SM-1)出土の遺物と土層断面図	39
第21図	遺構平面および土層断面図	40
第22図	遺構平面および土層断面図	41
第23図	遺構平面および断面図	42
第24図	遺構出土の遺物(1)	43
第25図	遺構出土の遺物(2)	44
第26図	遺構出土の遺物(3)	45
第27図	遺構出土の遺物(4)	46
第28図	遺構出土の遺物(5)	47
第29図	遺構出土の遺物(6)	48
第30図	遺構出土の遺物(7)	49
第31図	包含層出土の土器(1)	53
第32図	包含層出土の遺物(2)	54
第33図	包含層出土の遺物(3)	55
第34図	包含層出土の遺物(4)	56
第35図	包含層出土の遺物(5)	57
第36図	包含層出土の遺物(6)	58
第37図	包含層出土の遺物(7)	59

第38図	包含層出土の遺物 (8)	60
第39図	包含層出土の遺物 (9)	61
第40図	包含層出土の遺物 (10)	62
第41図	包含層出土の遺物 (11)	63
第42図	表土層および盛土出土の遺物 (1)	64
第43図	表土層および盛土出土の遺物 (2)	65
第44図	表土層および盛土出土の遺物 (3)	66
第45図	表土層および盛土出土の遺物 (4)	67
第46図	表土層および盛土出土の遺物 (5)	68
第47図	大谷地貝塚出土土器の変遷 (Ⅱ～Ⅳ群土器)	72

表

第1表	発掘調査トレンチ一覧	83
第2表	出土遺物一覧	84
第3表	遺物計測一覧	85





第1図 遺跡位置図

第I章 調査に至る経過

大谷地貝塚遺跡は余市町の東部に位置し、海岸線から約200m内陸部に入った丘陵の裾に開けている。海岸線寄りには、町の大動脈であるJR函館本線、国道5号が平行して走り、後背地には広域農道が伸びているなど、近年開発が著しく進められている地域である。

大谷地貝塚を含むこの地域一帯は、昭和40年代前半までは、隣接する大川地区から国道の両側にぶどう園が続く、本町有数の果樹地帯であった。昭和40年代後半に入ると、大川地区より順次市街化の波が押し寄せ、道路網の整備に伴い樹園地は住宅地へと変貌し、今もなお宅地化が進められている。現在では、大谷地貝塚の周辺に僅かに農地が残されているに過ぎないが、この地域もまた、都市計画法における都市計画地域に指定され、市街地としての位置づけがなされている。

このような中、平成8年3月、町内の建設業者より、大谷地貝塚遺跡の核心部を含む地域の開発行為が町の所管課に申請され、町教委の合議に付された。申請内容は、現況農地である当該地を整備し宅地分譲しようとするもので、面積は約3万2千平方メートルである。町教委では、当該地が文化財保護法に規定する周知の包蔵地であることから、同法に基づく事前協議を提出するよう開発業者に指導を行い、同年4月1日に開発業者より事前協議書の提出がなされた。その際開発業者より早急に範囲確認調査を実施してほしい旨要望があったため、直ちに北海道教育委員庁文化課埋蔵文化財係と調整を行い、4月中の日程で調査を実施することにした。

以上の経過を受けて、平成8年4月24日～25日の両日道教委担当官が来町、開発業者、地権者及び町教委担当者立会のもと、範囲確認調査を実施した。その結果、27ヶ所のピットから土器片、黒曜石、石皿、石斧等が多数出土し、遺構も検出された。

翌4月26日、開発業者、地権者、教育長他余市町教委関係者同席のもと、道教委担当官より以下の通り概況の説明があった。第一に、大谷地遺跡本来の微高地部分は一部耕作により包含層が失われているが、大半の部分が残っており、遺物量も豊富であること。次に、遺跡の範囲は当初考えられていたよりも広く、山側には堅穴住居があり、海側は低湿地遺跡となっていること。さらに、貝塚と併せて考えると極めて貴重な遺跡であること等である。いずれにせよ、遺跡の重要性から考えてさらに詳細な分布調査が必要であること、その結果如何によっては史跡指定の可能性があること等が示唆され、開発行為許可については、現時点では困難であるとの講評であった。

町教委としてはこの講評を踏まえ、開発業者、地権者に理解を求めるとともに、詳細な分布調査の実施について内部検討を行うこととした。

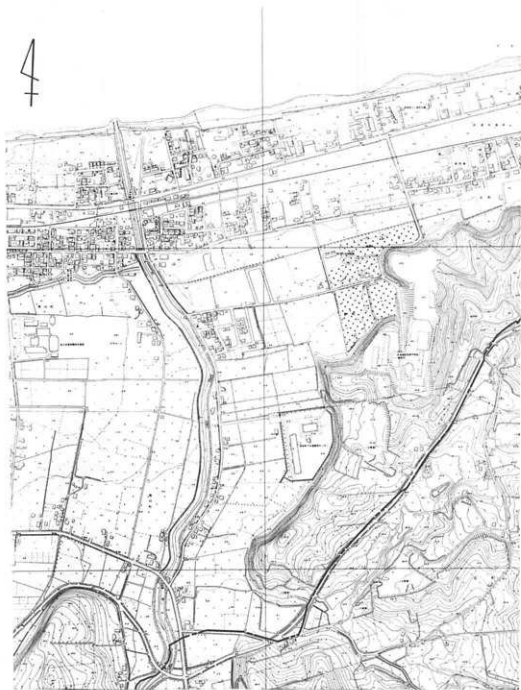
なお、この席上隣地の低湿地遺跡土地所有者から、自己所有地も宅地開発の計画があるため事前協議を提出したい旨申し出があり、同地も早急に範囲確認調査を実施することとなった。

平成8年5月13日、北海道教育委員会より範囲確認調査の結果「現状保存」の旨回答があり、その旨事前協議申請者に通知を行った。また、5月21日には隣接する低湿地遺跡の範囲確認調査を実施、山側から遺物が出土し、遺跡の広がり確認された。

その後町教委では道教委と協議を重ね、平成9年度に詳細分布調査を実施すること、地権者の意向を受け、調査は基本的に単年度で終了させ耕作への影響を最小限に止めること等を確認した。

平成8年11月6日、文化庁記念物課担当官が来町、大谷地貝塚遺跡の現地調査を行った。この際、道教委よりの範囲確認調査の結果説明と併せ、町教委より経過説明と遺物保存についての意向を述べ、次年度の詳細分布調査実施に向けて要望を行った。

これらの経過を踏まえ、町教委では平成9年度より調査体制を整備するとともに、「遺跡発掘事前総合調査」として文化庁補助、及び北海道市町村振興補助金の交付を受け、同年5月12日より調査に着手したものである。



第2図 遺跡周辺図

第二章 大谷地貝塚の歴史的経緯

大谷地貝塚を歴史的に見た場合、大きく2つの観点がある。一つは貝塚そのものの調査であり、他は、ここから出土した遺物についての論考である。ここでは両者について簡略的に概観する。

大正7年、寺田貞次は「北海道小樽附近古代住民の遺跡について」(注1)において「此丘陵の西側は余市町に至る間一帯の平野をなす。丘陵の北端より国道に沿ひて西すること約5町、山麓に当り、水田と泥沢地との中間に東西に永き一砂質地あり。二三の農家散在せり。その東端、東西約60間、南北約21間の地域には貝殻、累々、殊に東端の小高き所に於て最も多く、殆んど白色を呈す。今開墾して豆を植う。貝殻にはカキ、ハマグリ、ナガニシ等多く、土器の破片、黒曜石其他の石片多く散在し、少量なれども獸骨を混ぶ。此地の土器は褐色又は黒褐色にして、厚さ2、3分の薄手物より厚さ5分の厚きものをも発見し、大形のもの多き感あり。」と記している。

大正8年、寺田貞次「余市附近の土地と古代住民」(注2)では、続編と言えるもので、余市を中心としている。それによると遺跡分布の第10号に相当し「第十號、登貝塚、春部貝塚の西南、沼澤(俗稱大沼)の對岸、俗稱丸山の麓、約七段三畝歩の畑地在り、(余市澤町時田藤吉氏所有地)其中約一段歩の處貝殻累々石鐵土器を出す、附近農家の談に依れば、先年黄金岩石を發見せし事あり、又人骨の發見さるる事あり其頭骨は吾人の頭骨に比し偉大なりと、此等は貝塚研究上注意すべき點なれば更に調査報告の機至らん事を希望し居れり。」と記している。

大正14年、京都大学清野謙次により発掘調査されている(注3)。この経過については、大正14年7月初旬に札幌で開催された大日本病理学会の帰途、小樽に立寄り、「同地在住の五十嵐鐵氏の案内で川上漸君と共にこの貝塚を発掘した」とし、その後この地の発掘関係者に依頼して多くの表採遺物を入手したようである。

遺跡発掘の場所は確定できないが「遺跡地の中央部以東には貝層がある。中央部から以西は貝殻がなく厚さ数寸ないし尺余の黒色有機土から成り、この黒色土層から土器片を出す。すなわち遺跡地の東半分は貝塚で、西半分は住居跡である。そこで私達は遺跡地の東部及び西部をも発掘した。砂質であるから発掘は容易であつた。ただ東部に至るほど貝層は厚くなり深さ2尺以上に達した。・・・遺跡地の殆んど中央部の貝層から不完全な人骨が一体出た。頭部を南東にした仰臥屈葬であつた。」としている。

これらの経過について河野常吉によると次のように記されている(注4)。

「大谷地貝塚 余市町大字黒川村の東部、春部村に近き處に位し、余市蘭嶋間道路及鉄道線より南方約數町、丸山の麓、里道より西方に延長せる砂丘にあり。此砂丘は東西二町余、南北二十五間、其北側は低湿地にして高約一丈、南に漸降して水田に接す。西方亦湿地にして、登川の低湿地なり。此砂丘は一面遺物散布地なれども、其内貝塚は、山麓遺跡を去る約十間の處より、長二十五間、幅平均五間の處とす。貝殻層の厚は一定しないが、最も厚い所は二尺以上ある。此處は、余市沢町時田国太郎所有の畑にして多年耕作せしも、地味不良なるを以て小作者も喜ばず。大正十二年、今の小作者小川梅吉代りて耕作せり。

貝塚貝殻中には、獸骨、鳥骨、魚骨も混じている。又、貝塚の内外に石鐵、石斧其他石

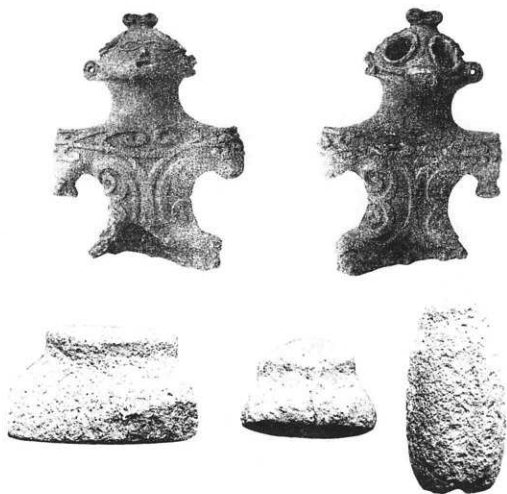
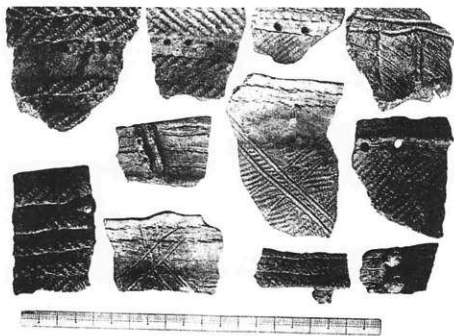


北海道人類學會雜誌

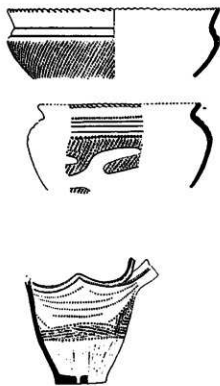
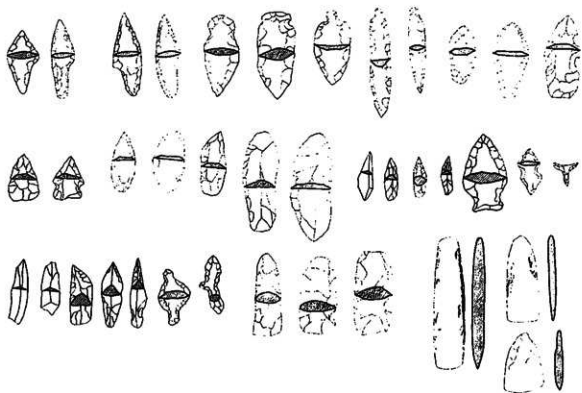
第一號
大正八年三月五日發行

口 論	...
一	...
二	...
三	...
四	...
五	...
六	...
七	...
八	...
九	...
十	...
十一	...
十二	...
十三	...
十四	...
十五	...
十六	...
十七	...
十八	...
十九	...
二十	...
二十一	...
二十二	...
二十三	...
二十四	...
二十五	...
二十六	...
二十七	...
二十八	...
二十九	...
三十	...
三十一	...
三十二	...
三十三	...
三十四	...
三十五	...
三十六	...
三十七	...
三十八	...
三十九	...
四十	...
四十一	...
四十二	...
四十三	...
四十四	...
四十五	...
四十六	...
四十七	...
四十八	...
四十九	...
五十	...

第3圖 『北海道人類學會雜誌』大正8年（注2文獻）



第4図 大谷地貝塚出土の遺物（注3文献）



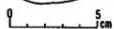
紡錘車



垂飾



彩石



第5圖 大谷地貝塚出土の遺物 (注3・8文献)

器屑散布し、土器片亦多くして、厚手も薄手も相応にあり。又、赤色を塗りたる土器片あり。時田貞次氏の「余市附近の土地と古代住民」（大正8年三月発行 北海道人類学会雑誌）に「附近農家の談によれば人骨の発見さることあり。其頭骨は吾人の頭骨に比し偉大なりと。此等は貝塚研究上注意すべき点なれば、更に、調査報告の機至らんことを希望し居れり」と記せり。大正十四年夏七月、清野謙次、川上漸氏来り、三名の人手を以て此貝塚を発掘し人骨一体を得て帰られたが、人骨の状態は、仰臥屈葬なりしと云う。人骨の性質に於て本州の貝塚人骨に類似していると云う。」

昭和時代には次のような記述がある（注5）。

昭和6年頃、小川梅吉氏が馬耕した際、ヒスイの小玉7個が入った朱塗り小土器が出土。

昭和7年夏、小樽中学校の尾川氏が生徒6名と共に発掘し、小樽図書館で報告した。

昭和8年夏、北海道大学の河野広道博士が発掘し円筒土器3個を得た。

昭和9年夏、余市中学校の三輪田先生が生徒と共に掘り、同時期に小樽市中学校の一先生も生徒と共に掘り、土器一つを得る。同時期に小樽図書館長今川福次郎手宮小学校の仲尾先生も掘られて小土器を得る。

昭和9年、五十嵐鐵により『大谷地貝塚之層位的研究』が刊行され、平面図及び層位的な土器文様の変遷などを報じている。この調査がどのような方法でなされたか、そしてその位置などについても不鮮明であるが、公にされたことによって一躍この貝塚の重要性が指摘された意義は非常に大きい。また当時として地層の原理を応用した層位的調査も見逃すことができない。

「大谷地貝塚は忍路郡春部村大字浜中字大谷地にあって大きさは奥行約十五間間口約十間坪数百五十坪許りである。・・・貝塚のある処は西南に長く延びた低い丘で其の丘の西側は「ヨシ」が沢山生えて居る谷地であったが東西北の三方面は早く水田になり西北側は昭和八年に埋められて畑になった。・・・今回発掘して縦断面を作って見ると下層に先づ自然の砂があって其の上に約十種の貝層があり其の上に二十種許りの少し黒んだ砂層があり其の上に又約四十種の貝層があり更に其の上に八十種許りの前よりも黒んだ砂層があり。下の貝層は薄いが土圧のために縮つたことを考えなければなるまい。試掘して見ると広さも上の層より狭く上の層一つの処が多い。そうして西北方面は元から土地が高かった様だ。中央部には表面にも貝がある処から見ると昔は高い方にもあったのが低い中央部にころげ落ちたとも考えられる。そうすると三層になる。東隅を試掘したら三層の処もあったが表面は極く薄い。兎に角、私は掘った処の現在は二層であった。二層ある事は時代違いに同じ所を二度貝塚に使用したことになる。」

昭和33年 河野広道による「小樽、余市附近の重要史跡」（注6）において「フゴッベ洞窟のある丸山と地続きの丘陵（現在は鉄道線路によって中断されている）斜面にフゴッベ貝塚がある。余市式土器と亀ヶ岡式土器が出土する。ここから1キロほど余市によつた所に大谷地貝塚があるが、客土のために掘りくずされて原型をとどめない。」とある。

以上、大谷地貝塚について記してきたが、昭和に入り多くの部分調査が行われつつも、遺跡そのものが失われていった経過があったことが理解できる。

遺物については、清野謙次によって多くの遺物が紹介されているが、縄文時代晩期の中空大形土偶（現存7寸強、脚部欠損）は注意すべきと言える。また河野広道、名取武光に

よる貝製の腕輪、さらに河野広道による彩石も重要である(注7・8)。

土器については余市式の標識遺跡となっていることはよく知られているところである。

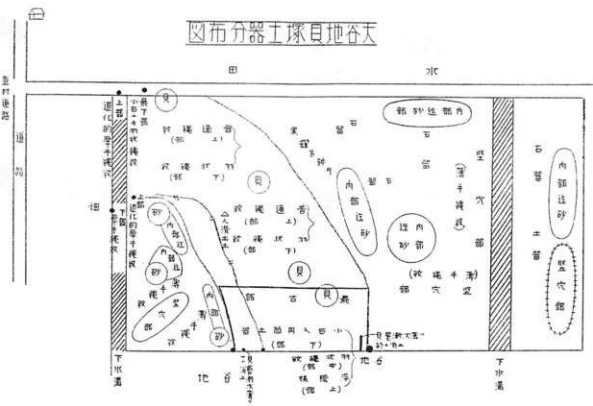
層位的発掘によって五十嵐鐵はその土器の特徴について「本貝塚の層位的特徴の最要点第一貝層の土器は小石交じりで脆くて右拙で羽状貼付縄文で鉢形土器であった。其中でも「小石交り」が幹の幹である。第一砂層の土器は略々前同様であるが其の幹は小石を含む物が少なくなって稍々堅緻の趣が見えた事である。第二貝層の土器は羽状貼付縄文土器の全盛時代で実用向なガッチリした作品が多くあった。全盛と共にこれで満足出来ないで美を追うて他に進路を求めんとした。第二砂層の土器は新機軸を開いて芸術的にあらゆる伸展を試みた。そうして全縄文土器の黄金時代と賞せられる亀ヶ岡式土器に至る準備が出来た。」としており、さらに余市郷土文化研究会においても講演している。しかし、一部の土器写真にとどまっていることから具体性に欠けているものであった(注9)。

土器型式として「余市式」が明記されたのは昭和10年に河野広道による「北海道石器時代概要」(注10)である。氏は第2類厚手式土器を細分してD群とし、D1、D2に分けている。その後、桑原護は「余市式土器」の特徴を詳細に分析している(注11)。最近では、資料の増加も相まって、どのような範囲のものを型式として把握すべきか、また編年的位置づけについても疑問されているところである。このことについては高橋理により整理されており(注12)、貝塚出土の発掘資料及び採集資料については小樽先史懇話会によって集成(注13)されているので参考になるところである。

引用文献

- 注1 寺田貞次 1918 「北海道小樽附近古代住民の遺跡について」『考古学雑誌』9-3
- 注2 同上 1919 「余市附近の土地と古代住民」『北海道人類学雑誌』1
- 注3 清野藤次 1969 「後志国余市郡余市町番部字大谷地貝塚」『日本貝塚の研究』
- 注4 河野常吉 1925 「河野常吉ノート」(宇田川洋編)
- 注5 五十嵐鐵 1934 「大谷地貝塚之層位的研究」
- 注6 河野広道 1958 「小樽、余市附近の重要史跡」『北海道学芸大学考古学研究会連絡紙』8
- 注7 河野広道・名取武光 1938 「北海道の先史時代」『人類学先史学講座』
- 注8 河野広道 1958 「余市出土の彩色せる石」『北海道学芸大学考古学研究会連絡紙』13 (宇田川洋編 1984 「河野広道ノート〜考古編5」)
- 注9 五十嵐鐵 1936 「大谷地貝塚出土器に表れたる縄文土器の發達経路」
- 注10 a 河野広道 1935 「北海道石器時代概要」『ドルメン』4-6
- 注10 b 同上 1959 「北海道の土器」『郷土の科学』23
- 注11 桑原護 1968 「余市式土器」『考古学雑誌』54-1
- 注12 高橋理 1996 「余市式土器再考」『北海道考古学』32
- 注13 小樽先史懇話会 1977 「大谷地貝塚と五十嵐鐵〜余市式土器をめぐる」

層位	土質	出土品	位置	備註
第一層	赤土	土器	東部	...
第二層	赤土	土器	東部	...
第三層	赤土	土器	東部	...
第四層	赤土	土器	東部	...
第五層	赤土	土器	東部	...
第六層	赤土	土器	東部	...
第七層	赤土	土器	東部	...
第八層	赤土	土器	東部	...
第九層	赤土	土器	東部	...
第十層	赤土	土器	東部	...



第6圖 『大谷地貝塚之層位の研究』昭和9年（注5文獻）

第三章 周辺の遺跡

余市町内には現在60ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。立地として海岸に発達する砂丘上には縄文時代中期～近世、丘陵上には縄文時代早期～後期の遺跡が分布する傾向がある（第1図参照）。

登川右岸遺跡は市街地から東方に約3kmにある登川河口から約600m上流の右岸に位置し、黒川砂丘上に立地している。この遺跡は平成8年の範囲確認調査で発見されており、大谷地貝塚の西方約600mにある。

大谷地貝塚の背後には標高20～30mの丘陵が広がっており、登町2・3遺跡が北海道埋蔵文化財センターにより平成元年に発掘調査されている。

登町2遺跡は縄文時代中期の円筒土器上層式、見晴町式、天神山式、柏木山式、同後期トリサキ式、手稲式等が出土している。

登川3遺跡は縄文時代早期の東釧路Ⅳ式、同中期の天神山式、柏木山式、同後期の湧元式、大津式、同晩期の大洞系土器等が出土している。

大谷地貝塚の東方約1km、フゴッベ川左岸の丘陵斜面から沖積低地にかけてフゴッベ貝塚があり、北海道埋蔵文化財センターにより平成元年に発掘調査がされている。

フゴッベ貝塚は大谷地貝塚と同様に大正時代から知られており、同じ貝塚内に立地と時期の異なる貝塚を区別する意味で松下地点、埋文センター地点がある。

埋文センター地点からは縄文時代前期の円筒土器下層式を主体として続縄文、擦文時代にかけて遺物が出土している。

遺構として住居跡39軒、土壇150基、貝塚ブロック、焼土24ヶ所が発見されており、縄文時代前期～中期末の様相を知る上で重要である。

栄町5遺跡は、西崎山ストーンサークル下の平坦部にあり縄文時代晩期の亀ヶ岡式系の土壇群が発見されている。

また、北海道指定文化財としての西崎山ストーンサークルがある。標高約70mの細長い丘陵上に4ヶ所ほどの配石群が発見されており、小樽市忍路、地鎮山ストーンサークルとともに群をなしていると思われる。

また国指定史跡フゴッベ洞窟もある。この洞窟内に200以上を数える刻画があり、全国的に類例がなく北方との関係が指摘されており、毎年多くの来館者が訪れている。しかし最近では洞窟内の風化が激しく、刻画に影響を及ぼすことが考えられるため、フゴッベ洞窟保存調査委員会を発足して保護の方法について検討中である。

参考文献

- 北海道埋蔵文化センター 1989 『登町2遺跡・登町3遺跡』
同 上 1989 『フゴッベ貝塚』
同 上 1990 『栄町5遺跡』
駒井和愛 1959 『音江』
フゴッベ洞窟調査団 1970 『フゴッベ洞窟』

第IV章 遺跡の地形と層序

大谷地貝塚は、その地名でわかるように湿地を形成し、隣接の小谷地とともにこの一帯不毛の地であったようである（第8図）。

そのような中において貝塚のある場所は砂丘の高台に位置しており、畑などの耕作に連していた場所であった。

遺跡周辺は、砂丘（または浜堤）、沖積低地、丘陵から成っている。

砂丘は、現汀線に平行な高まりとなり、二つの砂丘列が知られている。海岸近くのものは大川砂丘、その南方は黒川砂丘と呼ばれているもので大谷地貝塚は後者に立地している。

沖積低地は登川と春部川に発達しており丘陵緩斜面との境界は不明瞭のことが多い。

丘陵は固結度の低い凝灰質砂岩と安山岩質火山角礫岩から成り、それぞれ小椋累層の下部凝灰質砂岩層と上部集塊岩層に対比される。

丘陵の頂部は割合に平坦であり、沖積地にかけて緩斜面となっている。この丘陵地では赤褐色の風化層が現地表下に発達することが多く、遺跡の背後にある丘陵地でも赤褐色の風化層が見られる（第9、13図）。

遺跡の層序は前述した黒川砂丘上にあるもので、基本的な層序は以下の通りである。

I層 表土層及び盛土

I a 黒褐色砂層 表土（耕作土）

I b 黄褐色土層 盛土

I c 灰褐色土 盛土

II層 暗褐色砂層 遺物包含層

II a 乾燥しやすく、サラサラしている

II b やや湿気を帯びている（III a と識別が困難な場合がある）

III層 茶褐色砂層

III a 湿気を帯びている 遺物包含層

III b 湿気を帯び、縞状を呈する

IV層 泥炭層

V層 青色砂質層

VI層 青色粘土層

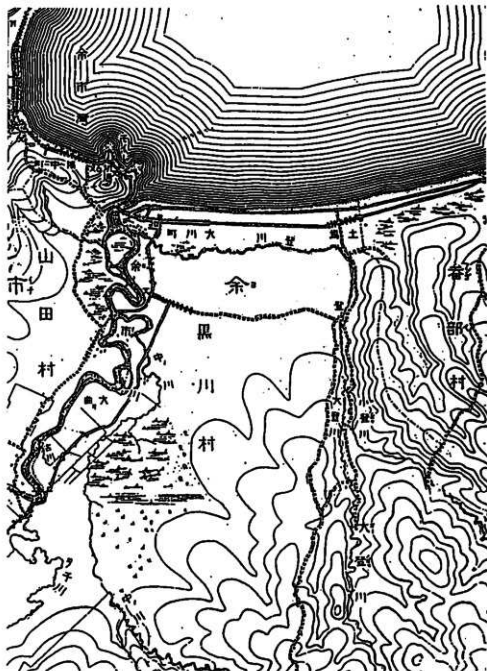
遺跡の表面では多量の土器破片、黒曜石フレイクが採集できることから表土においても多量の遺物が出土している。部分的にはII層上面までも耕作されており大形土器も時折見られる。I層からは縄文時代晩期～後期にかけての遺物が含まれている。II層とIII層は砂丘という特殊事情によるもので識別が困難な場合があり、同一層でありながらも上部と下部で出土遺物の土器型式が相違することもある。砂層は乾燥すると白色砂となり土層断面はまったく不鮮明となる状況である。III bについては茶褐色砂層中に青色砂層が縞状に見られるもので、南北断面は北方に傾斜しており、固くしまり遺物の出土は皆無であることから自然堆積層である。IV層は泥炭層であり湧水に浸っており、埋れ木や木葉が発見される。V層は粘性を帯びる青色砂層であり水分を多量に含んでいる。VI層は青色粘土層で非常に粘性が強く雨天が続いた場合は長期的溜水状態となるので水中ポンプで水抜きしなけ

ればならない状況であった。

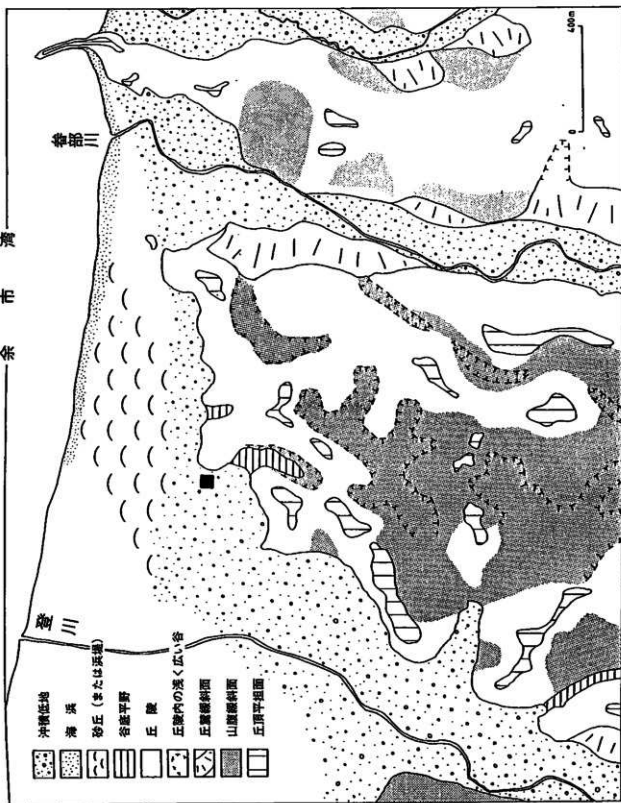
貝層はⅡa層（SM-1-4）、Ⅲa層（SM-5）が見られる。かつて五十嵐鐵が分層したものと対比するとⅢ層が第Ⅰ砂層、Ⅱ層が第Ⅱ砂層となるが、第Ⅰ、Ⅱ群土器がほとんど出土がなく、第Ⅲ群土器が主体となっている点で不自然さがある。そのように考えるとさらに上層にあったものが、排土等により失われてしまった可能性も捨てきれない。

引用文献

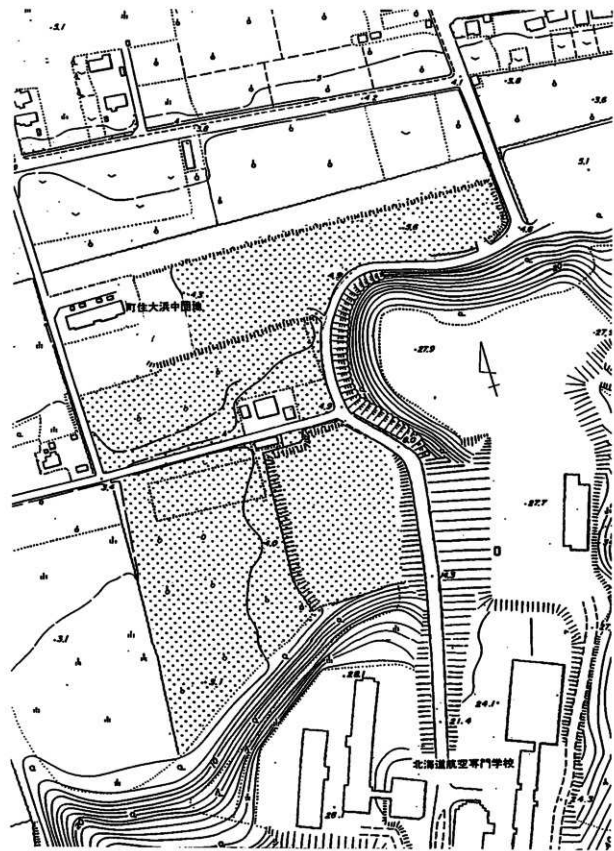
- 1、花岡正光 1989 「地形地質」 『登町2遺跡・登町3遺跡』
- 2、北海道地下資源調査所 1990 『余市地区表層地質調査報告書』
- 3、久保武夫 1996 「余市海岸の砂丘」 『余市高校研究紀要』



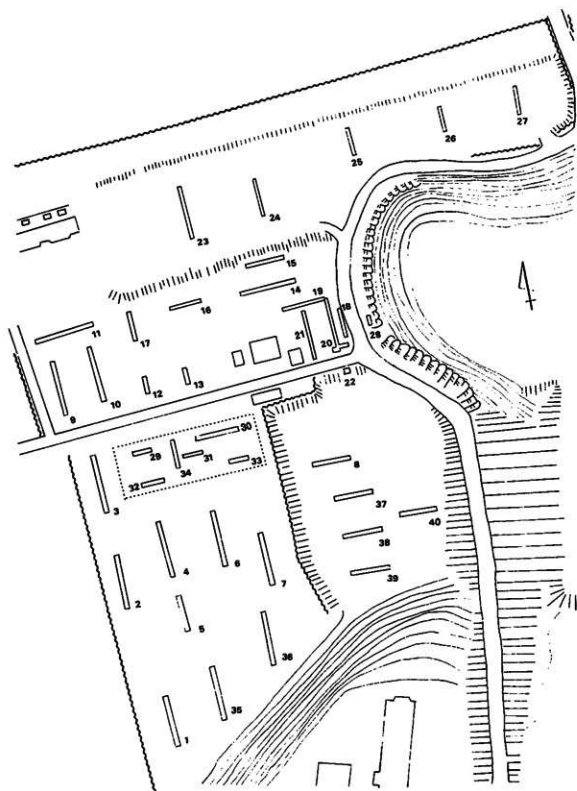
第8図 大谷地貝塚周辺の古地図（明治29年 陸地測量部）



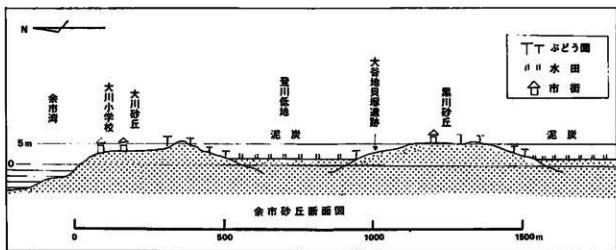
第9図 大谷地民部界周辺の地質図 (文献1に加筆)



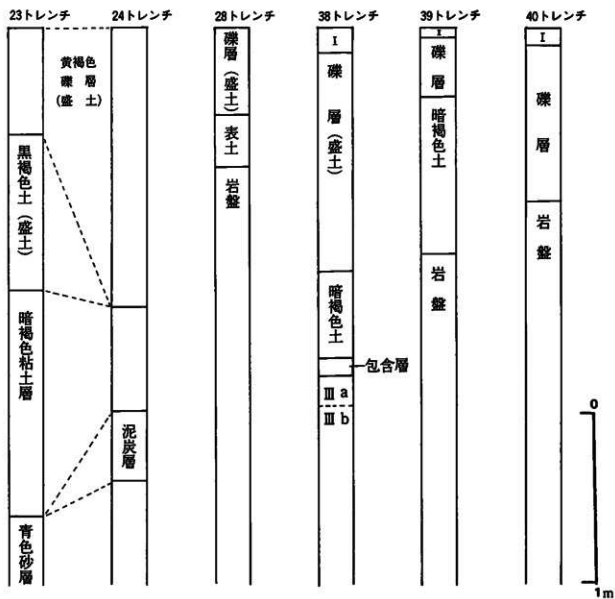
第10回 発掘調査区



第11図 調査区とトレンチ

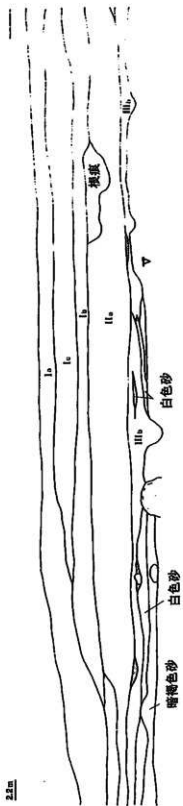


第12図 砂丘断面図

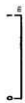
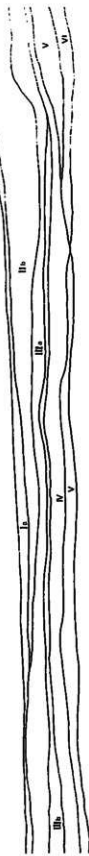


第13図 土層柱状図

20トレンチ

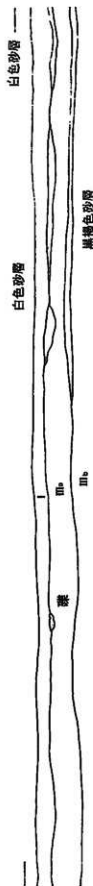
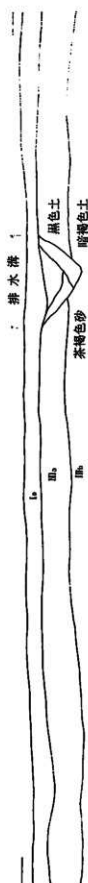


17トレンチ (N→S)



第14圖 土層断面図

4トレンチ (N→S)

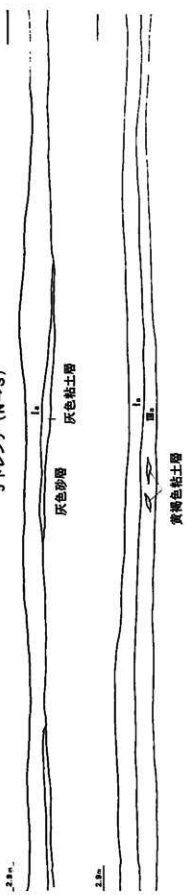


12トレンチ (N→S)

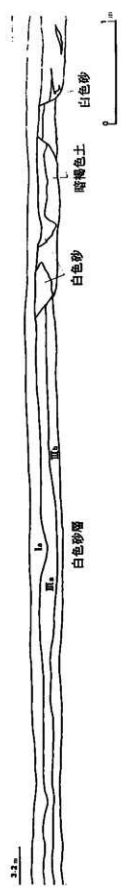
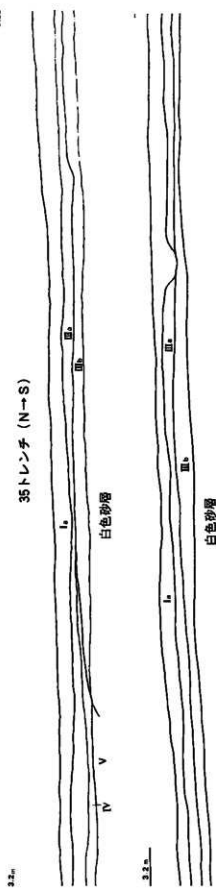


第15図 土層断面図

5トレンチ (N→S)



35トレンチ (N→S)



第16図 土層断面図

第V章 発掘調査の方法と遺構・遺物の分類

1、調査の方法

大谷地貝塚の調査対象面積は周辺の埋藏文化財包蔵地を確認する必要もあるため約35,000㎡とした。

範囲確認調査においてある程度の子測がつくことから遺構の確認を優先したく、トレンチ方式を採用することとした。基本として1m×30mとし、砂丘に直交するように設置した(第11図)。

この遺跡周辺はブドウ果樹園であるため、地表にはブドウ棚、支柱、土中にはブドウ根が入り組んでいるため、その間を掘ることとなり、状況に応じて長さ、方位を考慮したが、野菜畑などで、どうしても困難な場所があった。また収穫時に影響を及ぼさないために、5～7月、11月の2回に分けて、全体を把握するように努めた。

トレンチ名は調査した順に数字で呼称することとし、大小合わせて40ヶ所を調査した。調査区内の北部は湿地を活用するために約2mにも及ぶ埋土(盛土)、また南東部は航空専門学校建設時における斜面土砂流出を防止するため約1.5mの盛土がなされているため人力による掘り下げは不可能であった。そのためにこの地区のトレンチは重機によるものとし、包含層の有無を確認する程度にとどめた。それは盛土下の調査においては、基盤が砂層であり非常に危険が伴うからであり、現実にトレンチ内は次々に土砂が崩れていく状況であった。

貝塚については20cmメッシュを設定して自然遺物を取り上げ、自然乾燥の後2mmのフルイで遺物を選別し、サンプルブロックについてのみ設定して数量分析をした。限られた時間のため20トレンチのみを報告の対象として、他のトレンチ貝塚は自然遺物の種別のみにとどめた。

貝塚内から出土する自然遺物として、植物遺体(種子)、動物遺存体(貝類、魚類、哺乳類、ハ虫類、両生類)などがあり、目立つ貝種のブロック、大形骨などについては土器とともに図面に記録した。

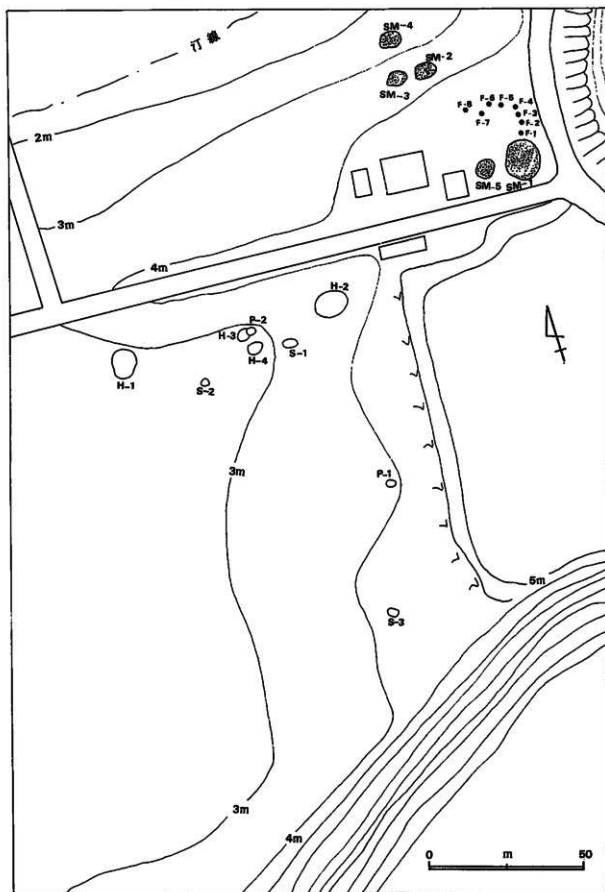
遺物の取り上げについては、耕作土(表土)及び攪乱と思われる箇所については一括し、包含層出土の遺物については、全て点として図面に記録し、番号を付して標高とともに取り上げた。図面は20分の1とし、集中一括の場合は10分の1図とした。

地層については各トレンチの東面を基準とし、遺構についてはそれぞれに対応して図面記録とした。

しかし、北部及び南東部の盛土あるトレンチ内については、土砂崩壊が激しく危険なために柱状図のみとした。

トレンチの下部は部分的に粘土層、泥炭層が見られ、湧水により浸水するために水中ポンプを作動させながらの調査をした。泥炭層部では自然木がみられたため、一部分を採集し、同定することとした。

各トレンチの調査終了後は即座に埋戻して現状復旧としてブドウの育成に支障ないように配慮した。



第17図 遺構の配置図

2、遺構・遺物の分類

● 遺 構

遺構は住居跡、土壇、貝塚、焼土、石器集中跡が確認され、それぞれH (House)、P (Pit)、SM (Shell Mound)、F (Fire Place)、S (Stone) の略号を付した。

住居跡は4軒で全て縄文時代中期末の北筒式と思われるもので、堅穴の底面が平坦状を呈しているものを一応そのように考えた。

土壇は墓と言えるもので、2基ベンガラを埋土から検出できたもので、縄文時代中期末の北筒式(P-2)と晩期(P-1)のものと思われる。

貝塚は5ヶ所、混土貝層1ヶ所、混貝土層4ヶ所である。前者は一般にいわれる貝塚であり、後者は混貝土層ではあるが、魚骨層というべき性質が濃い。発掘調査では20cmメッシュごとに遺物を取り上げるとともに、大きな貝、骨、遺物については10分の1図で記録した。SM-1~4は第Ⅲ群土器(余市式)、SM-5は第Ⅱ群土器(北筒式)に相当すると思われる。

● 土 器

土器は遺構、包含層、表土を含めて約12,644点の出土があり、土器の諸特徴から便宜的に6群に分類した。

第Ⅰ群土器 縄文時代中期後半の天神山式土器に相当するもの

色調は赤褐色を呈し、口縁部は断面三角形で、山形口縁をなし、ヘラ状工具による刻みが施されている。

第Ⅱ群土器 縄文時代中期後半の北筒式(トコロ6類)に相当するもの

a類 刺突文と押し引き文が施されるもの。

b類 刺突文のみもの

c類 押し引き文のみもの

第Ⅲ群土器 縄文時代中期末~後期初頭と思われる余市式に相当するもの

a類 刺突文を施すもの

b類 粘土紐に押圧縄文を施しているもの

c類 粘土紐に縄文を施すもの

第Ⅳ群土器 縄文時代後期初頭の湧元式、手稲砂山式等に類似するもの

地文は縄文または無文で沈線文を直線、曲線を描くもので深鉢形を呈する。

第Ⅴ群土器 縄文時代後期半ばの手稲、ホッケマ式に類似するもの

磨消縄文を有する土器で太目の沈線により区画されている。

第Ⅵ群土器 縄文時代晩期の亀ヶ岡式に相当するもの

大半が表土(耕作土)、攪乱層から出土しているもので、小片となって出土している。大淵B~C2式にかけての土器群で浅鉢、深鉢が主体をなし小形のものが多い。器厚は薄く、非常に硬質である。

これら各群において、トレンチ内では第Ⅱ群土器が主体となっており、第Ⅲ・Ⅳ群土器は貝塚の周辺に限られている。第Ⅰ群土器は南部の山ぎわ付近、第Ⅵ群土器は表土、攪乱

層（溝状遺構）からのものである。かつては縄文時代晩期から統縄文時代にかけての包含層もあったようであるが、湿地帯の埋立て、耕作によるなどの諸事情によって失われてしまったと言える。

● 石 器

石器、剥片は遺構、包含層、表土を含めて約11,171点の出土であり、石器は92点と少なく、大半がフレイク類である。

石 鏃

4 cm以下の尖頭器で細身であるものを対象としている。出土したものは形態では有茎、木葉形と言える。SM-1～4出土のものは第Ⅲ群土器、他は第Ⅱ群土器に伴う可能性がある。材質は黒曜石、頁岩である。

石 槍もしくは両面加工のナイフ

4 cm以上の尖頭器で石銃と称しているものである。第Ⅱ群土器に関連しているものと思われる。材質は黒曜石、頁岩である。

スクレイパー類

側縁に刃部を作出しているもので、片面加工のものが多。出土遺物には石匙と称される石器は見当たらない。材質は黒曜石、頁岩であり、第Ⅱ群土器に関連するものと思われる。

石 鏃

剥片の先端部を尖らせているもので、断面が四角形を呈するもの。

出土したものは縦長フレイク的一端を加工している場合が多い。材質は黒曜石、頁岩であり、第Ⅱ群土器に関連するものと思われる。

石 斧

磨製及び打製石斧の2種類があり、両者とも刃部は研いで蛤刃状を呈している。製作としては、面取りとともに敲打によって形をつくり、研磨仕上げをしている。材質としては泥岩、片岩類を使用しており、第Ⅱ群土器に関連するものと思われる。

砥 石

細長い棒状のもので、断面が四面体を呈するものもある。研磨面は全体にU字形を呈するものや溝状に成っているものもある。材質は砂岩であり、第Ⅱ群土器に関連すると思われる。

敲石・台石・磨石

握りこぶし大のものから頭大のものまであり、敲きとともに磨面も見られるものである。材質は安山岩、珪岩と思われる、第Ⅱ群土器に関連するものと思われる。

これらの石器については土器との伴出及び層序から、年代を推定しているもので貝塚出土のものはSM-1～4は第Ⅲ群土器、他は第Ⅱ群土器に関連するものと推測される。

金 属 製 品

古銭である寛永通宝が耕作土（表土）直下から一点出土している。他に近世としての遺物がないことから後世の混入の可能性もある。

そ の 他

現代のものとしてビニール、空き缶、ガラス製品などが盛土内から多数出土している。

第VI章 遺構と遺物

遺 構

住居跡 (H-1 第18、25図 No.11~16)

3トレンチ内にあり長さ4.65m、深さ0.3mを測る。中央部に焼土が見られ、土器が共伴して2個体、床面から土器片、黒曜石フレイクが数点出土している。土器は底部が欠損する北筒式土器と底部のみのものである。No.11は推定口径17.4cm、残存器高24.1cmを測る。口縁断面は三角形を呈し、直下に刺突文施している。地文は斜行縄文である。色調は黒褐色を呈し、胎土はわずかに小石粒子を含んでいる。内面は丁寧に整形されている。No.12は底径12.8cm、残存器高15cmを測る。色調は黄褐色を呈し、無節斜行縄文を地文とし結節部分を回転施文されている。No.13は羽状縄文を地文としている。No.14は押し引き文が見られ、No.15、16は斜行縄文が施されている。

住居跡 (H-2 第18、26図 No.1~8)

30トレンチ内にあり、長さ5.7m、深さ0.2mを測る。竪穴住居の端の部分と思われる床面は固くしまっている。床面は凹凸があり、風化の激しい大形砂岩が見られ、近くに直径20cm、深さ10cmの小Pitが見られる。No.1、2は刺突文を有するものである。No.3、4は押し引き文が見られる。No.5は粘土紐の貼付押し引き文が施されている。No.7は羽状縄文の境目に押し引き文を施している。No.6は斜行縄文を地文としている。No.8は底径3.4cmの小形無文土器である。

住居跡 (H-3 第18、26図 No.9~11)

34トレンチ内にあり、長さ1.9m、深さ0.3mを測る。この竪穴は西側に伸びるため仮に住居跡としたものである。竪穴の上面に木炭層が薄く見られる。No.9は口縁に肥厚帯を持ち押し引きを施している。No.10、11は刺突文とともに押し引きが見られる。

住居跡 (H-4 第23、26図 No.12~14)

34トレンチ内にあり、長さ2.5m、深さ0.2mを測り、床面は固くしまっている。No.12は口縁部はわずかに肥厚し、2条の押し引きが見られる。No.13は押し引きに刺突文が見られる。No.14は無文地に細沈線が見られる。

墓 墳 (P-1 第23、26図 No.15~16 第27図 No.1~3)

7トレンチ内にあり、長径推定2.05m、短径1.65m、深さ0.54mを測る。当初トレンチの調査において気づかなかったが、薄くベンガラがみられたために墓墳と確認したものである。埋土は埋戻しであり南側は根痕などにおいて攪乱されている。この墓墳内には約400個に及ぶ黒曜石のフレイク、チップが墳底から墳口にかけて混在している。これらのフレイクは接合が可能であることから、埋戻しをしながら原石を次々に割って入れたことが分かる。年代については表土直下から掘り込まれていることから縄文時代晩期の可能性が強いと思われる。

墓 墳 (P-2 第23、27図 No.4-8)

34トレンチ内でH-2と重複している。H-2の方が新しい。長径1.4m、短径1.2m、深さ0.3mを測る。北側の壁ぎわがわずかに赤くベンガラが混入されていた。北東にはわずかなくほみがあり黒曜石のフレイクが多少見られた。

No.4-7は斜行縄文を施す胴部破片、No.8は底部に木葉文が見られる。

台石集中跡 (S-1 第17、21、27図 No.9、10 第28図 No.1-2)

31トレンチのセクションに台石が見つかったので一部分を拡張してみた。砂層下部に4個の台石が約1.6mの範囲内に置いてあった。台石は河原石と思われ、わずかな擦面が認められる。

フレイク集中跡 (S-2 第17、28図 No.3-8 第29図 No.1-6)

32トレンチの西端で長さ約1m、厚さ約0.2mほどの規模で砂層下部から泥炭層上部にかけて黒曜石フレイク2,703点、1,855gが発見された。濃密な堆積をなしており、黒曜石は光沢をもつもの、小白色粒子不純物を含むものなど、少なくとも原石は4ヶ以上が搬入されている。原石は赤井川産のものと思われ、角礫が利用されている。

第28図No.3-5、第29図No.6は接合できたものであり、この場所で石器等を製作したものと思われる。フレイクは、自然面が多く見られるもので、No.4、5は石核である。細長い原石の平坦面を打面としてフレイクを作出している。

フレイク集中跡 (S-3 第17、29図 No.7-11)

36トレンチ内で表土(耕作土)直下から約1mほどの範囲内に黒曜石フレイク393点、頁岩フレイク1点、754gが散在して出土した。大形のフレイクが多く礫面を多く残している。黒曜石は光沢をもつもの、小白色粒子不純物を含むものなど、少なくとも原石としては3ヶ以上は搬入されている。4点の接合ができたので、石器製作場として使用していた可能性がある。原石は赤井川産のものと思われ、角礫が利用されている。

貝 塚

5ヶ所の貝塚が発見されており、混土貝層SM-1と混貝土層SM-2-5がある。SM-1-4は表土下の砂層中にあり第Ⅲ群土器、SM-5は第Ⅱ群土器に伴うものと思われる。その根拠としてSM-1は貝層中に土器が伴うこと、SM-2-4は、貝層下の砂層中に第Ⅱ群土器が出土すること、SM-5はSM-1に隣接しながら約1mの比高差があり、19トレンチの第Ⅱ群土器の包含層にほぼ対応できるからである。トレンチ調査であるため全体的計測は不可能であるがかなりの広がりがあると思われる。また混貝土層は4ヶ所にとどまらず、さらに多く存在していたことは予想されるところである。

SM-1 (混土貝層 第20図)

20トレンチの中央以南にあり南北5.6m、東西7m以上に及ぶ混土貝層である。貝塚は黄褐色ローム(盛土・客土)、表土(耕作土)に覆われている。南側は30cm以上も貝類

の堆積があり、北側に向かって薄くなっている。貝種ごとにブロックとなっているものが幾つか見られ、大形土器破片5点が発見された。人工遺物として骨角器をはじめ、土器小破片、黒曜石チップも混在している。

調査は貝塚の規模を事前に把握し、保存を主眼としているため、3ヶ所の部分サンプル(40cm四方)を暗褐色砂層上面まで掘り下げて採取し、また貝塚上面に見られた大きめの鳥獣骨類についてはサンプル部分にとらわれず採集した。

(1) 土器(第24図 No.1~4、第25図 No.1~2)

No.1は推定口径38cm、推定器高64cm、底径11cmを測る大形土器である。貝塚内では口縁部と底部は離れて出土したが、同一個体と思われる。色調は黄褐色を呈し、若干の小石粒子を含んでいる。地文に羽状縄文を施文した後、口縁部を含め9本の粘土紐の貼付をしている。内外面とも丁寧に整形されている。

No.2は推定口径21cm、残存器高20cmを測る。色調は黒褐色を呈し胎土に若干の小石粒子を含んでいる。斜行縄文を数段配しており、原体施文時における縄末端が見受けられる。

No.3は推定口径21cm、残存器高16cmを測る。色調は黒褐色を呈し胎土に小石を含んでいる。羽状縄文を地文とし、口縁部に2条の押圧縄文が見られる。

No.4は推定口径30cm、推定器高42cmを測る。色調は黒褐色を呈し、胎土に小石を多く含んでいる。縄文原体は粗く、単節斜行縄文とともに複節斜行縄文も見られる。口縁部に3条の貼付が見られ、口唇部及び貼付上に斜行縄文を施している。

No.1A、2Aは同一個体と思われ、推定口径29cm、残存器高13.5cmを測る。色調は黒褐色を呈し小石粒子を含む。網目状燃糸文が全体に施されている。

(2) 石器(第25図 No.3~8)

全て黒曜石製の両面加工の石鏃であり、厚みがあるものである。No.4、7は有茎部を出しているが、他については意識しての有茎部はない。

(3) 骨角器(第30図)

20トレンチの貝塚ではより多くの骨角器が出土する可能性があるが、今回の調査目的が保存を前提としているため、貝塚ブロックサンプル以外は表層のみの遺物取り上げにとどめたことも関係あると思われる。

なお、材質については国立歴史民俗博物館西本豊弘氏のご教示を得た。

No.1 20トレンチP-18出土。残存長さ50mm、幅6mm、厚さ2mmを測り、材質は海獣骨である。成形擦痕が表裏に見られる。回転離頭銛の先端部破損と思われる。

No.2 20トレンチO-11出土。残存長さ50mm、幅7mm、厚さ2mmを測り、材質は大形の鳥骨?と思われる。鳥骨を半裁して先端を尖らせたもので、回転離頭銛の破片と思われる。

No.3 20トレンチG-4出土。長さ53mm、幅4mm、厚さ2mm、重量0.6を測る。材質は陸獣の肋骨?と思われる。光沢をもち保存状態が非常に良好な針である。断面は四角形を呈し、目穴は表裏から穿孔されている。

No.4 20トレンチG-4出土。残存長さ17mm、径2mmを測り、材質は陸獣骨である。針の先端部のみであり、縦に擦痕が見られる。

- No.6 20トレンチQ-9出土。残存長さ55mm、幅9mm、厚さ4mm、重量2.1gを測り、材質は海獣の肋骨である。背面左上部に穿孔の痕跡があることから再加加工品と思われる離頭鉋またはヤスとして使用されていた可能性がある。中央部に3mmの穿孔があり基部を作出している。
- No.7 20トレンチQ-18出土。長さ192mm、幅17mm、先端部厚さ8mm、重量32.7gを測り、材質は海獣トドの四肢骨である。尖頭器と言えるものでアワビおこしなどに使用したものと思われる。肢骨を裁断した後に先端部を尖らせたもので海綿体下部の擦痕が著しい。出土品の先端部は磨耗、欠損が認められることから製作当時はより尖っていたと思われる。
- No.8 20トレンチO-7出土。長さ197mm、幅14mm、厚さ9mm、重量28.9gを測り、材質は海獣トド?の腓骨と思われる。先端部のみを裁断して海綿体部分を尖らせているものである。尖頭器と言えるものでアワビおこしなどに使用したものと思われる。尖頭器の先端はわずかに欠損している。

SM-2 (混貝土層・第21、22、25、30図 No.5)

14トレンチ内中央部に位置し東西約3.8m、厚さ約15cmを測る。暗褐色砂層中に見出されるもので、混貝土層と言えるものである。貝類、獣骨はもろく残存はよくない。土層は黒褐色を呈し、フルイにかけると多量の魚骨が含まれていた。土器は2片が出土し、貼付が見られることから第Ⅲ群土器と言える。

骨角器(No.5)がA-17から出土している。残存長さ42mm、幅4mm、厚さ3mm、重量0.6gを測り、材質は陸獣骨の針である。断面が楕円形を呈し、目穴付近に擦痕が見られる。目穴は表裏から穿孔されている。

SM-3 (混貝土層・第22図)

14トレンチ内西部端に位置し、東西約1.33m、厚さ約10mほどの小さな規模である。暗褐色砂層中に見出されるもので、混貝土層と言えるものである。貝類、獣骨はもろく残存はよくない。土層は黒褐色を呈し、フルイにかけると多量の魚骨が含まれていた。

SM-4 (混貝土層・第22図)

15トレンチ内西部端に位置し、東西約5.7m、厚さ約20cmを測る。暗褐色砂層中に見出されるもので混貝土層と言えるものである。貝類、獣骨の残存はよくない。土層は黒褐色を呈し、貝粉がまばらに見られ、多量の魚骨が含まれていた。

SM-5 (混貝土層・第23図)

21トレンチ内に見られ南北約3m、厚さ20cmを測る。SM-1と隣接しながらも比高差が1m以上あり、第Ⅱ群土器の層と一致することから第Ⅲ群土器よりも古いものと言える。表土(耕作土)下には黄褐色ローム(盛土、客土~多量に瓦礫を含む)は厚く堆積している。

動物遺体の分析において、成人の上腕骨が出土しており、かつて貝塚から人骨が発掘さ

れていることから、関連した遺骨の可能性があると考えられる。

焼土 (F-1~8、第14、20図)

第19~20トレンチ内において焼土が8ヶ所発見され大きさは50cm前後である。F-1は焼土上に自然石が覆っているのみであり、他と同様に地床炉である。いずれも第II群土器に関係するものと思われる。

埋設土器 (第23、33図 No.12)

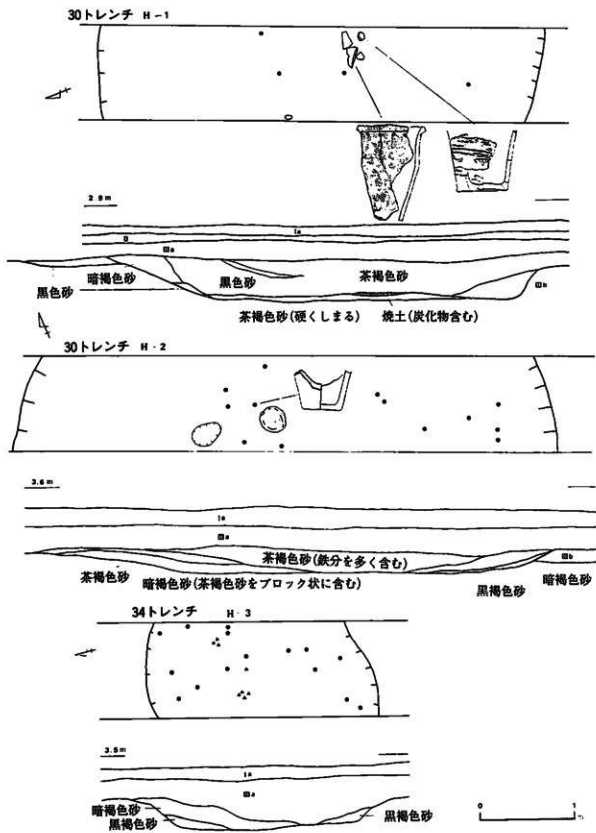
第29トレンチ内の暗褐色砂層を掘り下げたところ墳口径40cmの円形ピットがあり、その中に縦割に欠損した第II群土器が出土した。この土器は赤褐色を呈し、胎土に小石を含むもので推定口径18.6cm、残存器高21.8cmを測る。口縁が内湾し肥厚帯をもつ筒形土器である。口縁には竹管状工具による押引き文が二条、肥厚帯下にも押引きが見られる。地文は斜行縄文で沈線がまばらにみられる。

溝状遺構 (第19、21図)

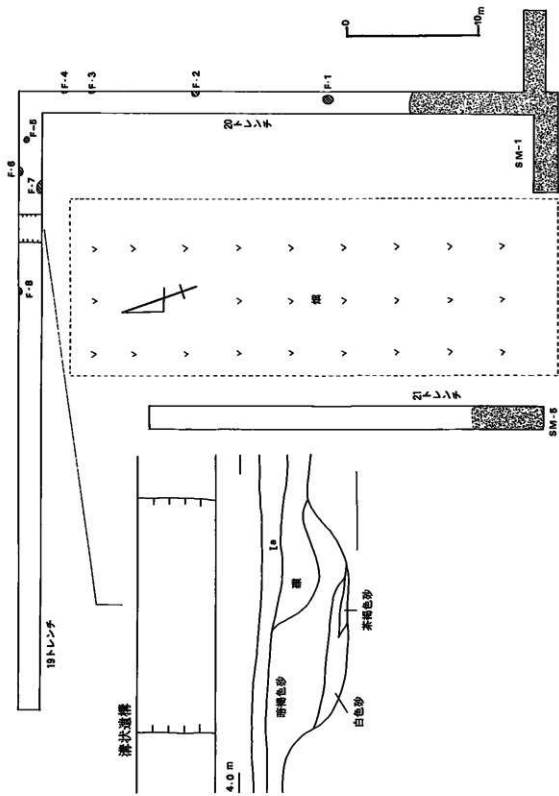
第14、19トレンチにおいて見られたもので、排水溝と思われる。

第VI群土器が多量に出土しており、以前の包含層遺物と思われる。土地所有者も知らないとの事なので戦前の可能性もある。

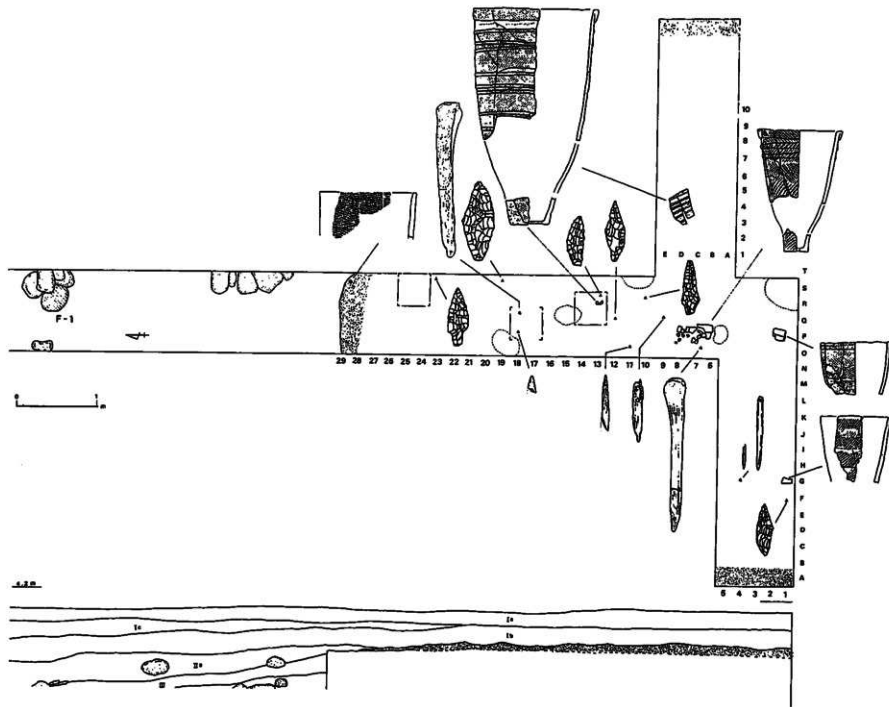
かつて五十嵐鐵が調査した際に下水溝を記録しているが、関連する可能性もある。



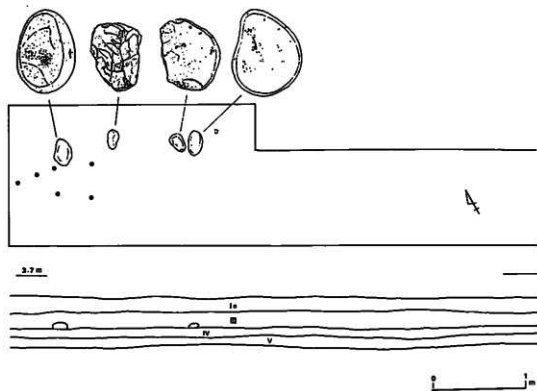
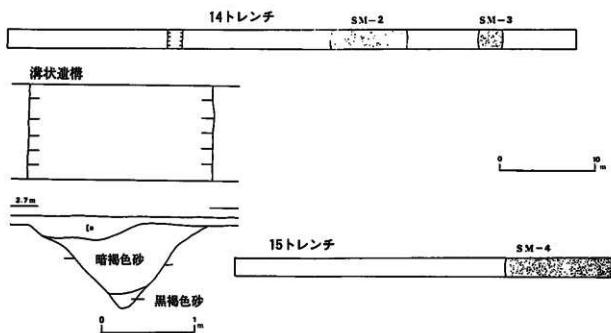
第18図 遺構の平面および土層断面図



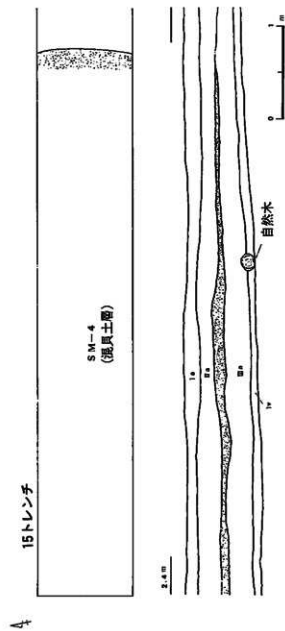
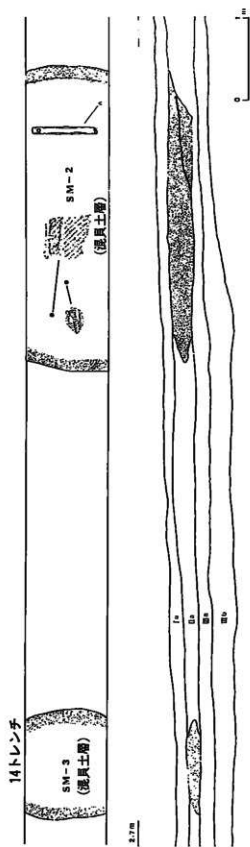
第19図 遺構配置と土層断面図



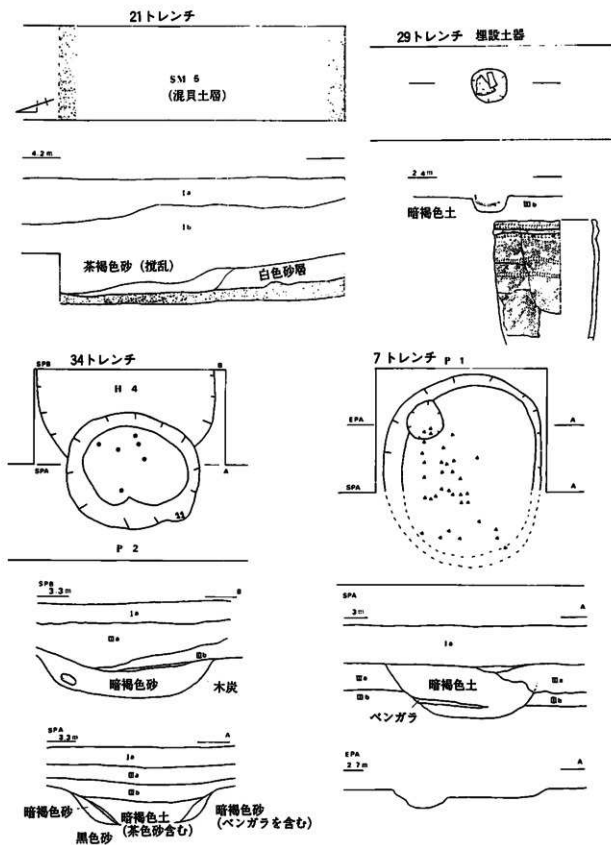
第20図 貝塚(GM-1)出土の遺物と土層断面図



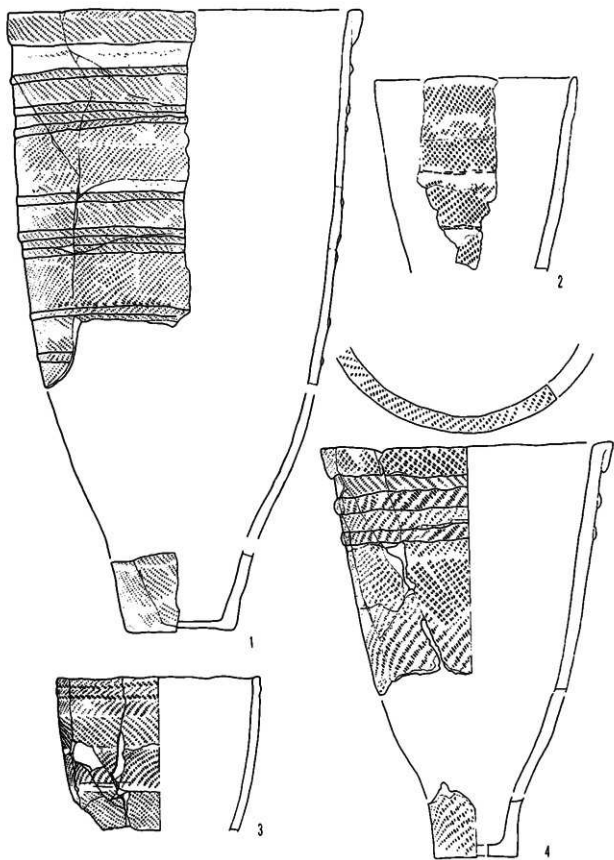
第21図 遺構平面および土層断面図



第22図 遺構平面および土層断面図

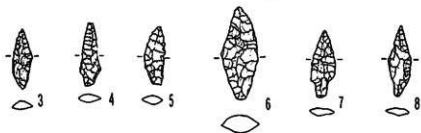
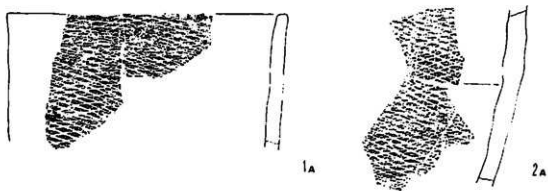


第23図 遺構平面および断面図

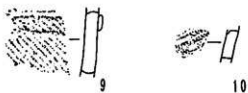


SM-1

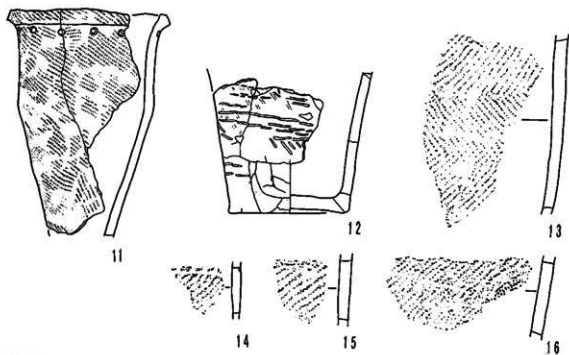
第24図 遺構出土の遺物(1)



SM-1

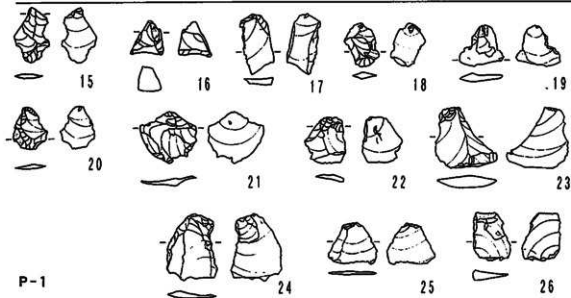
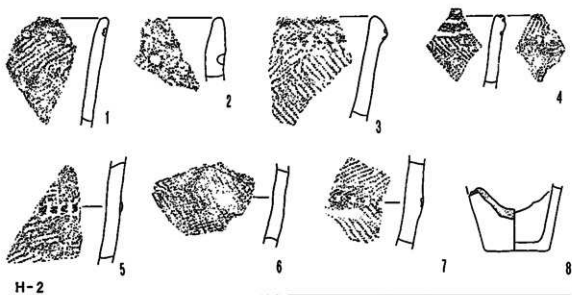


SM-2

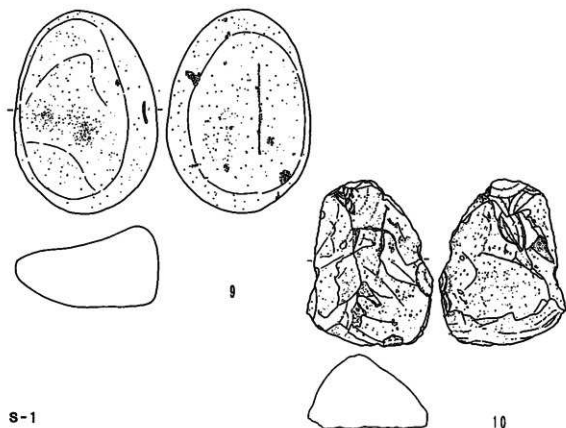
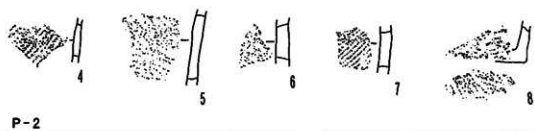
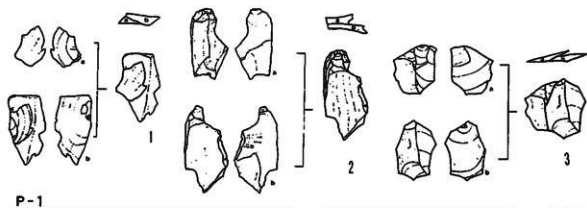


H-1

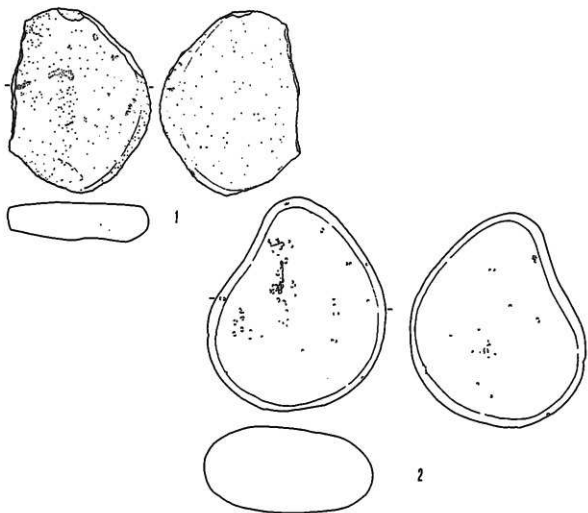
第25図 遺構出土の遺物(2)



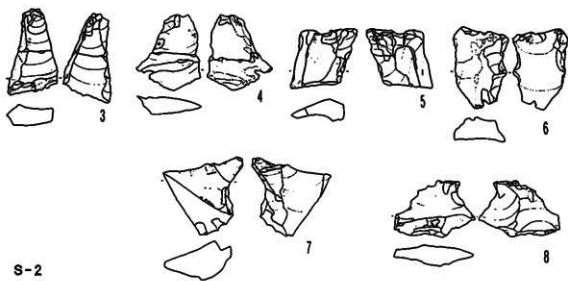
第26図 遺構出土の遺物(3)



第27図 遺構出土の遺物(4)

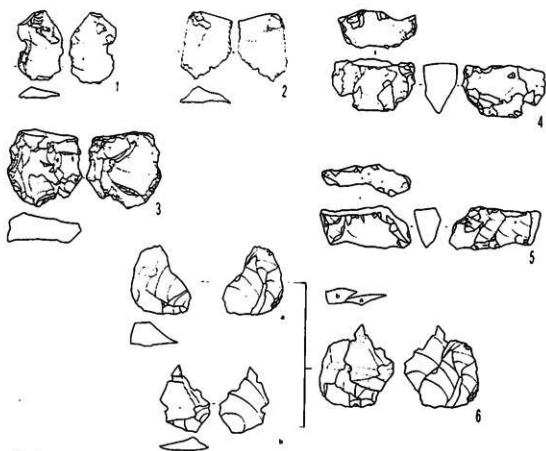


S-1

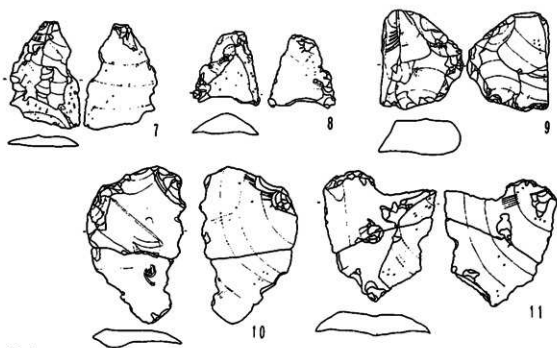


S-2

第28図 遺構出土の遺物(5)

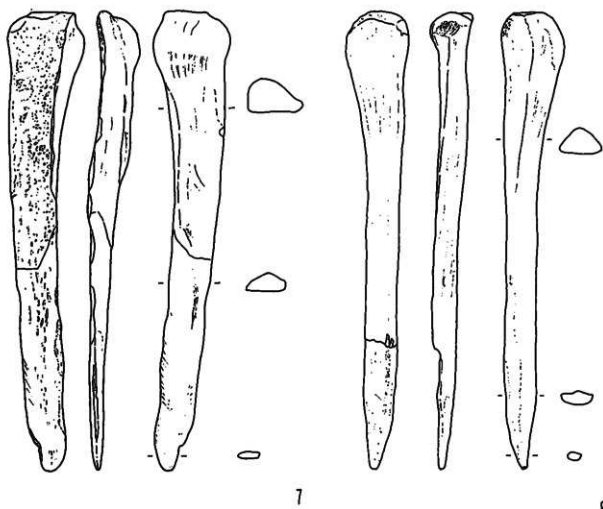
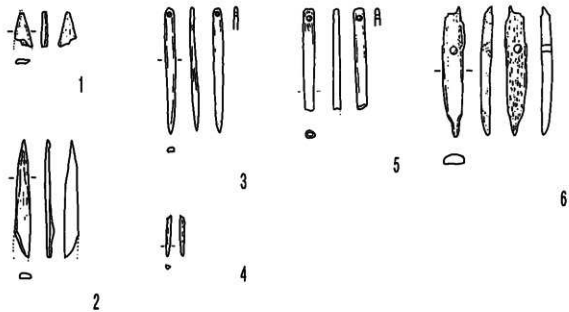


S-2



S-3

第29回 遺構出土の遺物(6)



第30圖 遺構出土の遺物(7)

第Ⅶ章 発掘区出土の遺物

1、包含層出土の遺物（第31～41図）

各トレンチに出土している遺物の特徴的な土器、石器として説明を加えることとする。

（1）土器（第31～35図）

第Ⅰ群土器（No.14～16） 口縁断面が三角形を呈しヘラ状工具で深い刻みを施すもので出土量は少量であり遺跡の南部に散在する。色調を赤褐色を呈し、胎土に小石粒子を含んでいる。

第Ⅱ群土器 刺突文、押し引き文などを施すもの。（第31、33、34図）

a：刺突文と押し引き文が併用されるもの。（No.5、12、17～41）

器形は深鉢で、口縁が肥厚し、その部分に1～3条の押し引きを施すことが多い。刺突は器面に対し直角に押し、棒状、竹管状工具を使用し、若干突瘤状になっているものもある。土器内面にも縄文を施す例もある。稀に胴部に粘土紐を貼付けて押し引きを施すものも見受けられる（No.17）。胴部には斜行縄文、羽状縄文、結節文が見られる。色調は赤褐色を呈し、胎土に小石を多く含んでおり、内面整形は丁寧である。口唇部は尖り気味、角形などがあり、山形口縁を有するものが多いように思われる。

b：刺突文のみのもの（No.4、7、42～46）

器形は深鉢で、口縁断面がやや肥厚、丸形、角形などがある。突刺文は器面に対して直角に施すものである。突刺文は器面に対し直角に押し、棒状、竹管状工具を使用し、若干突瘤状になっているものもある。土器内面にも縄文を施す例も稀にある。胴部には斜行縄文、結束羽状縄文、結節文、網目状燃糸文などが見られる。

c：押し引き文のみのもの（No.9）

色調は赤褐色を呈し、胎土に石粒子を含む筒形土器である。平縁で口縁下部にわずかな肥厚帯を有するが粘土紐を貼付けたものではない。口縁には櫛状工具による押し引き、肥厚帯下部にはヘラ状工具による押し引き文が見られる。胴部は斜行縄文を地文とし、細長い沈線が時折施されている。

第Ⅲ群土器 口縁に粘土紐による肥厚帯を有するもの

a：刺突文を施すもの（No.1）

色調は黒褐色を呈し、胎土に小石粒子を含んでいる。平縁で、口縁部に無文帯を形成し、棒状工具による刺突文を施している。胴部状半にも粘土紐を貼付けている。

b：粘土紐上に押し引き文を施しているもの（No.8、69）

No.8は赤褐色を呈し、胎土に小石粒子を含んでいる大型筒形土器である。燃りの異なる単節縄文を相互に数段施文し、その境に粘土紐を貼付け、縄文本体を押し付けているものである。器表の剝落が激しいが、内面は丁寧な成形されている。口唇部は角形で、丁寧に磨かれている。

c : 粘土紐による貼付けをしたあと縄文を施すもの (No. 2、63～68)

色調は暗褐色を呈し、胎土に小石粒子を含んでいる。No.2は口縁部に二条の粘土紐を貼付けた後に、J字状の貼付けをしている。施文順位は地文の縄文、粘土紐の貼付け、粘土紐への縄文施文となっている。縄文は単節斜行縄文で原体は横位回転が原則となっている。

第Ⅳ群土器 沈線文を施すもの (No.13、53)

No.13は暗褐色を呈し、胎土に若干の小石粒子を含んでおり、胴部の縄文は施文方向を変えながらのものである。胴部上半には棒状工具による浅い沈線文が見られる。No.53は無文地に沈線文を縦位、曲線状に施している。

第Ⅴ群土器 磨消縄文をもつもの (No.70)

赤色顔料を塗付しているもので一片のみである。縄文を施文し、後に沈線で区画し磨消している。色調は暗褐色を呈し胎土には小石を含まず、硬質である。

その他 (第34、35図)

胴部及び底部破片の第Ⅱ・Ⅲ群土器である。底部はわずかに張り出すもの、直線的なものがある。No.77、78は底部に木葉が見られるもので、大形の落葉広葉樹である。恐らく底部に砂などの付着を防ぐ意味で、地面に敷いたものがそのまま痕跡を残したものと思われる。

(2) 石器 (第36～84図)

石 鎌 (No.1～20)

全て両面加工のものであり、材質は黒曜石である。有茎、木葉形である。茎部は三角形を呈し、短い。

石 槍もしくは両面加工のナイフ (No.21～36)

板部が太く、中部より下半にマチを有している。大形の剝離面を残しながらも側縁は丁寧な作出されている。No.36は片岩類の剝片を利用している。

スクレイパー類 (No.37～47)

片面加工のもので、縦長及び横長フレイクの側縁に刃部を作出しているものである。大形剝離面をよく残しており、一部分には原石面も見られる。形態は様々であることから適当なフレイクを選定して石器として利用したものであろう。

石 鎌 (No.48～49)

縦長フレイク的一端を尖らせたものである。鎌部は断面四角形を呈し、磨耗の痕跡も見られる。No.49は黒曜石の原石面を多く残している。

石 斧 (No.69～74)

手頃な石を敲打と研磨によって作っており、刃部は蛤刃を呈している。いずれも刃部付近を欠損しており、使用していたことが窺える。No.71は刃部を欠損後も敲打しており幾度と利用されたのであろうか。No.73は刃部の一部を片刃状に研いでいる。No.74は局部磨製石斧と言えるもので粗削をした後に刃部を中心に研磨している。

砥 石 (No.75～77)

原石の両面及び四方を利用しているものである。75、76は断面四角形を呈しており、

No.76では溝状の磨き痕がある。

敲石・磨石 (No.78～84)

敲き面と磨り面を残しているもので、10～30cmのものまである。一般に扁平な河原石を使用しているものである。

2、表土・盛土出土の遺物 (第42～46図)

大谷地貝塚は大正時代から知られた遺跡であることはすでに記述してきたが、今日においてもこの砂丘一帯で遺物の表面採集ができる。

現在はブドウ園となっているが、それ以前は台風によって常に砂山が移動していたと聞き、そのたびごとに遺物が新たに見られたようである。

ここでは、表土(耕作土)、盛土、溝状遺構から出土した多量の遺物のうち比較するうえで参考となる土器のみを対象として紹介する。

第Ⅱ群土器 (No.8～20、31～33、107、109～113)

赤褐色を呈し、胎土に小石粒子を含んでいる。口縁部に肥厚帯をもつものが多く2～3条の押しきが見られ、口縁直下または押しき内に刺突を施している。押しきは逆時計回りに施文することが大半で刺突は器面に対して垂直に施している。この押しきは胴部にまで及ぶものがあり、粘土紐の貼付上にも施している。胴部の地文として斜行および羽状縄文が見られる。No.17は底部に落葉広葉樹の圧痕が見られる。

第Ⅲ群土器

No.1は黒褐色を呈し、推定口径25cm、残存器高20cmを測る。口縁は二重の粘土紐によって作られ、胴部には羽状縄文が見られる。No.2は黒褐色を呈し、推定口径29cm、残存器高18.3cmを測る。No.108は底部のみである底部付近まで粘土紐の貼付をした跡に押し縄文を施している。

これらの土器の特徴として胴部については相違ないが口縁部については粘土紐の貼付と折り返しのものがあり、口縁部の肥厚帯の少ないものは後者のようである。また、底部の形態において急にすぼまるものは古いと思われる。

第Ⅳ群土器 (No.5、22～27)

No.5は赤褐色を呈し、山形口縁をもつ。推定口径22.6cm、残存器高20.6cmを測る。地文は斜行縄文で、口縁部に無文帯をもち、ぎこちない曲線の沈線が見られる。No.3は無文土器で推定口径22cm、器高27cmを測る。口縁部で横位、胴部下半は縦位に整形が見られる。補修孔にしようと思われた痕跡が見られる。No.4は波形口縁を呈し、口径20.8cm、残存器高19.6cmを測る。縦位の整形が見られ胴部下半に斜行縄文がわずかに見られる。

第Ⅵ群土器 (No.6～7、41～106)

18トレンチの下水管理股溝、19トレンチの溝状遺構(排水溝)を主体とした攪乱部分から出土したものである。

縄文時代晩期の包含層は遺跡内では見当たらなかったが、かつては多くの遺物が出土していたようである。ただ、第7トレンチにおけるP-1は土器の出土はなかったが黒曜石を墓に散布している例などはこの時期のものと思われる。

浅鉢、深鉢、壺形土器が見られる。色調は黒褐色を呈し、胎土に小石をほとんど含まない。器高は薄く硬質である。口唇部は角形、丸形があり、刻みや押圧が見られる。

深鉢は体部に斜行縄文を施し、口縁部に爪形、短刻文を一周している。

浅鉢にはS字文が数段見られるものがあり、その下に短刻文を配している。(No.67-71) また沈線文による工字文風の曲線を施しているものもある。

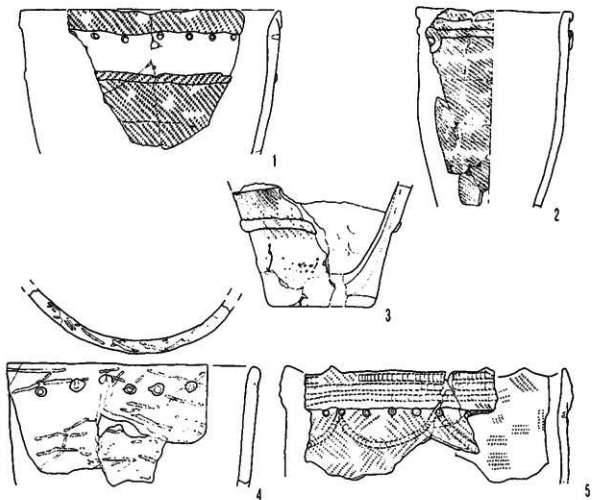
壺形と思われるものは口縁部のみである (No.74)。無文帯に沈線、短刻文が見られる。

金属器

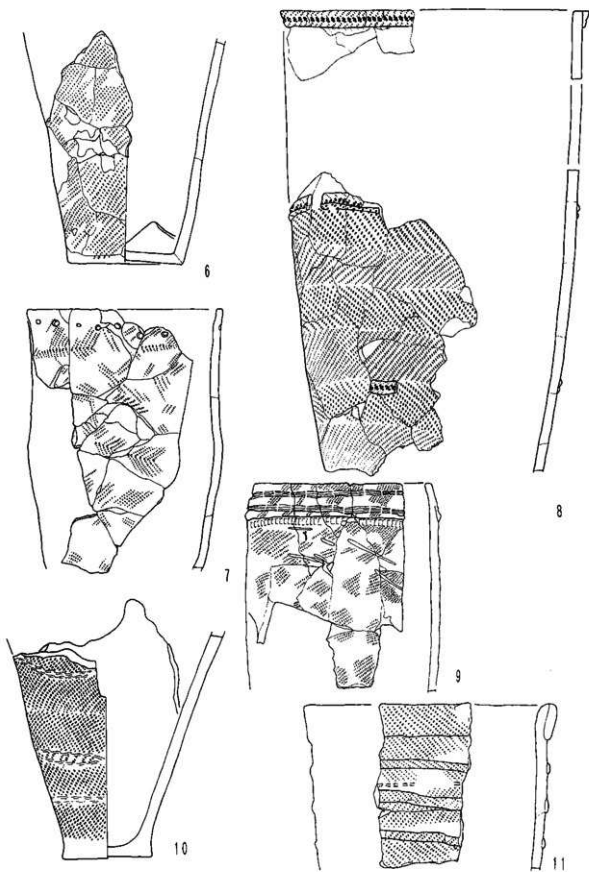
近世の寛永通宝である (No.114)。7トレンチ南部、耕作土 (表下) 直下から出土したものである。

その他

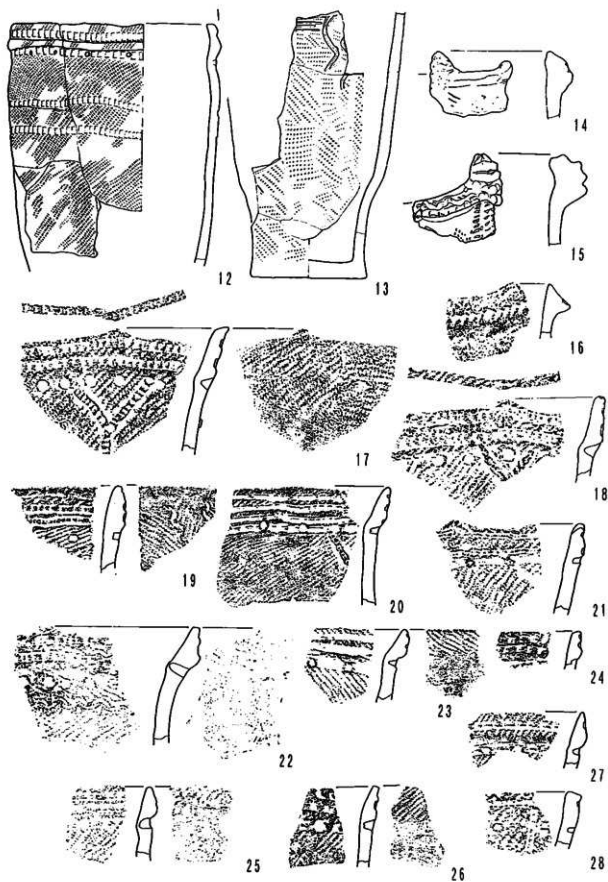
かつて鶏を飼育していたことがあるとのことで多量の骨類がまとまって出土している。また、盛土内からはガラス瓶、缶類、ビニール製品も多く出土した。



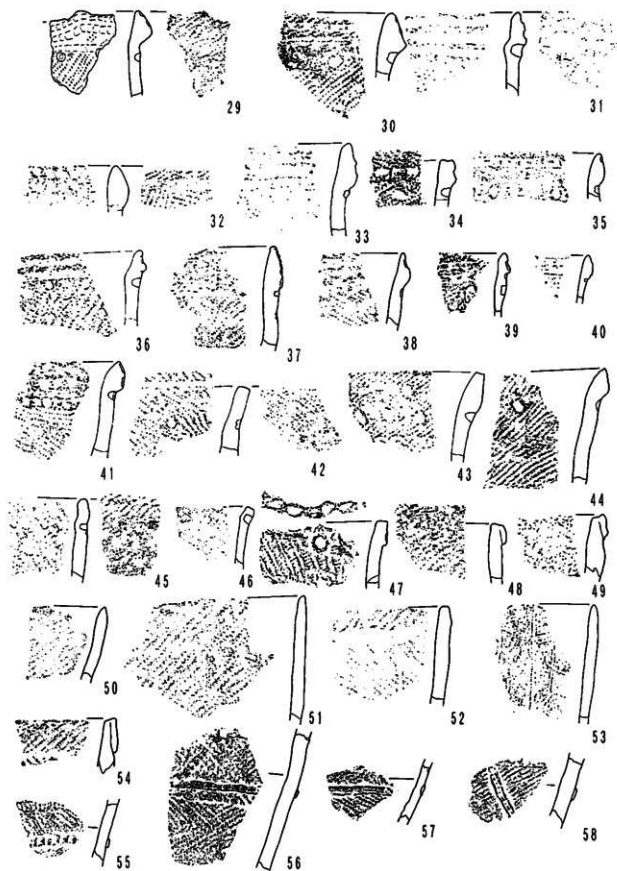
第31図 包含層出土の遺物(1)



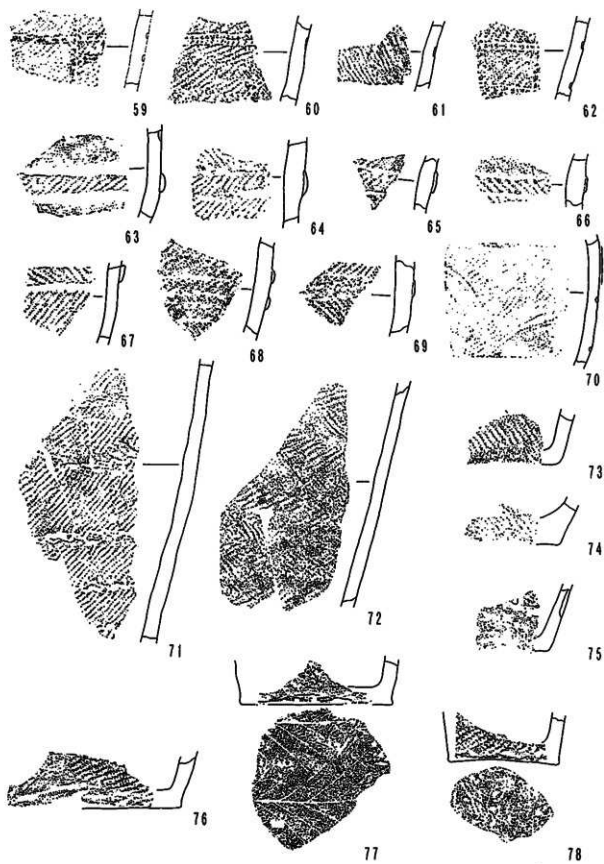
第32図 包含層出土の遺物(2)



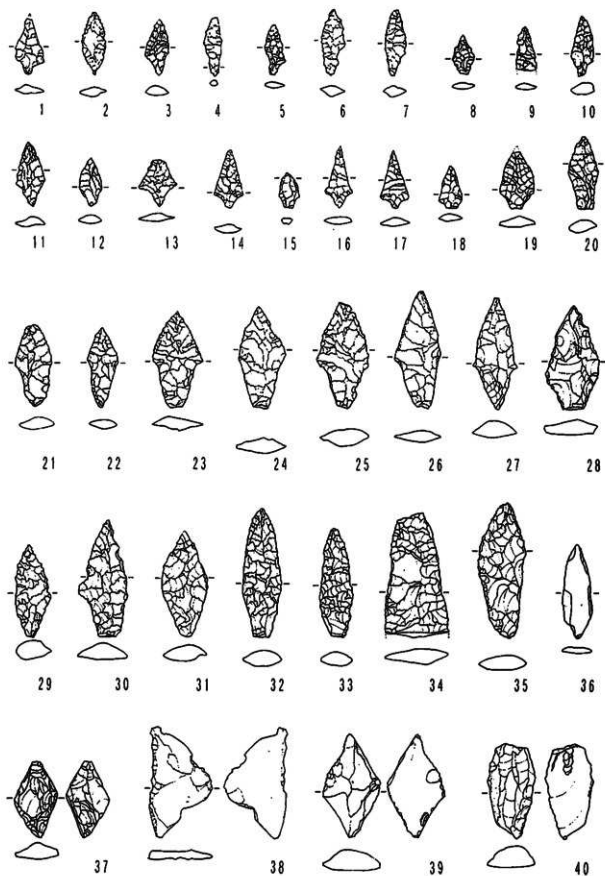
第33図 包含層出土の遺物(3)



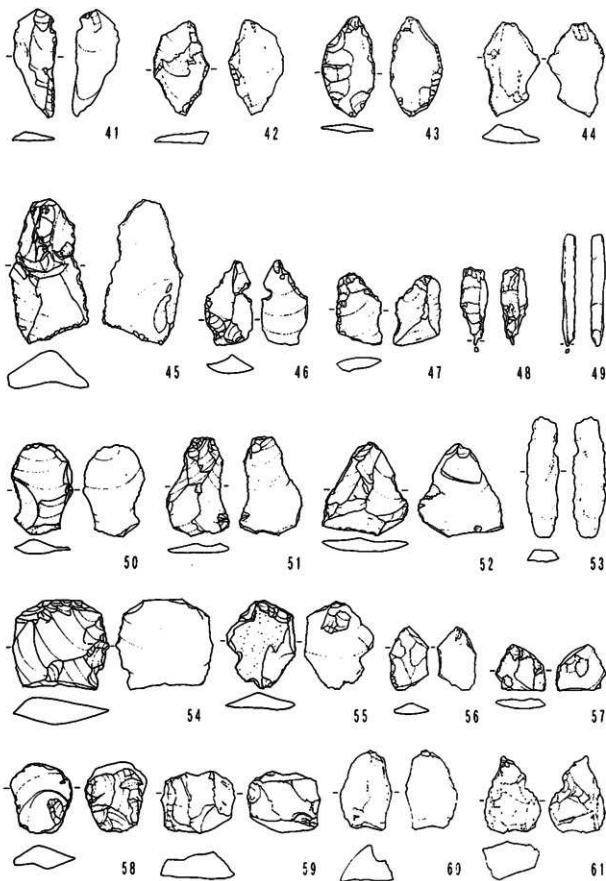
第34図 包含層出土の遺物(4)



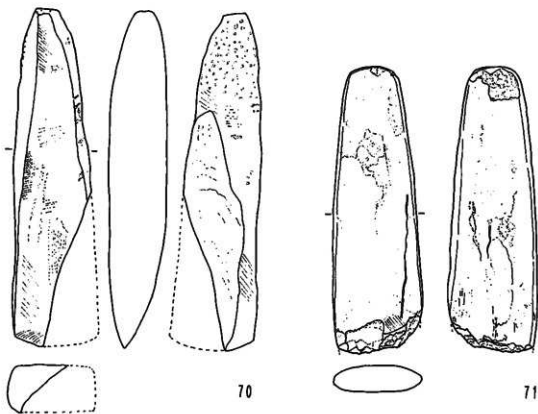
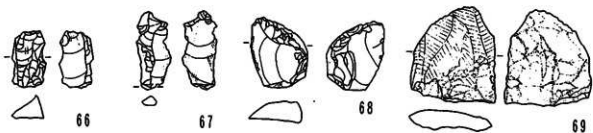
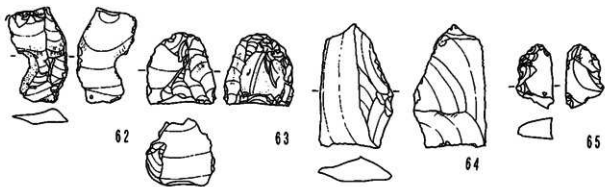
第35圖 包含層出土の遺物(5)



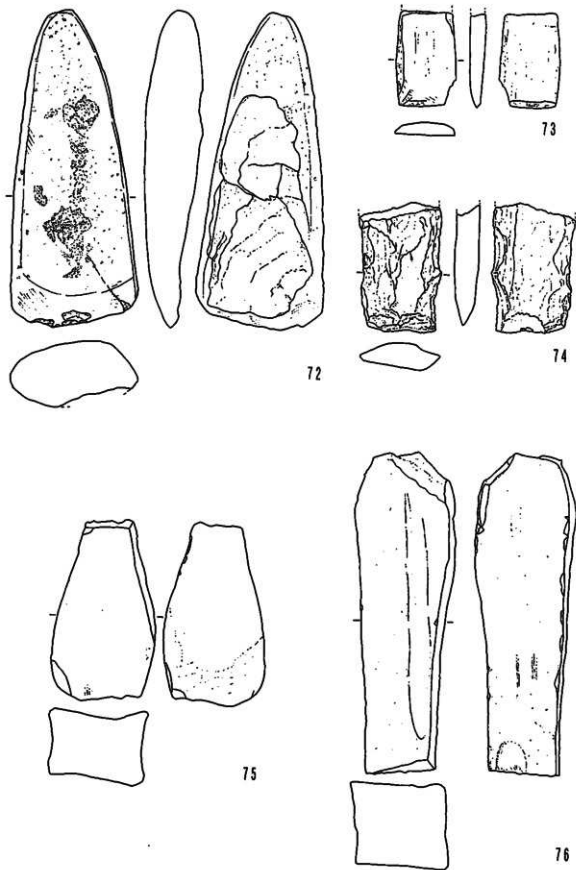
第36図 包含層出土の遺物(6)



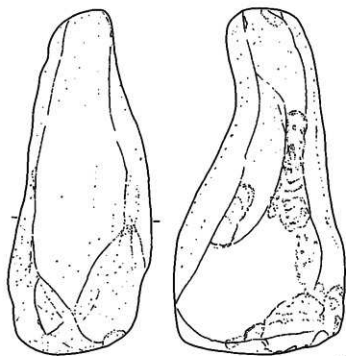
第37図 包含層出土の遺物(7)



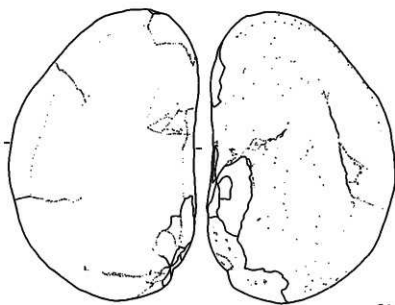
第38図 包含層出土の遺物(8)



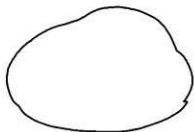
第39回 包含層出土の遺物(9)



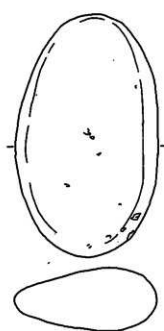
77



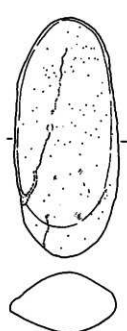
78



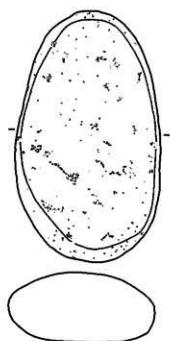
第40図 包含層出土の遺物(10)



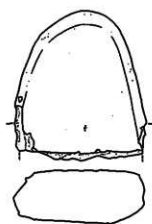
79



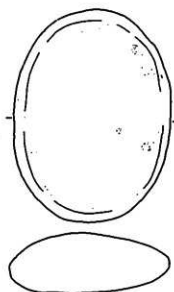
80



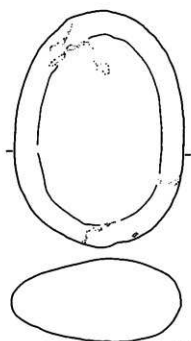
81



82

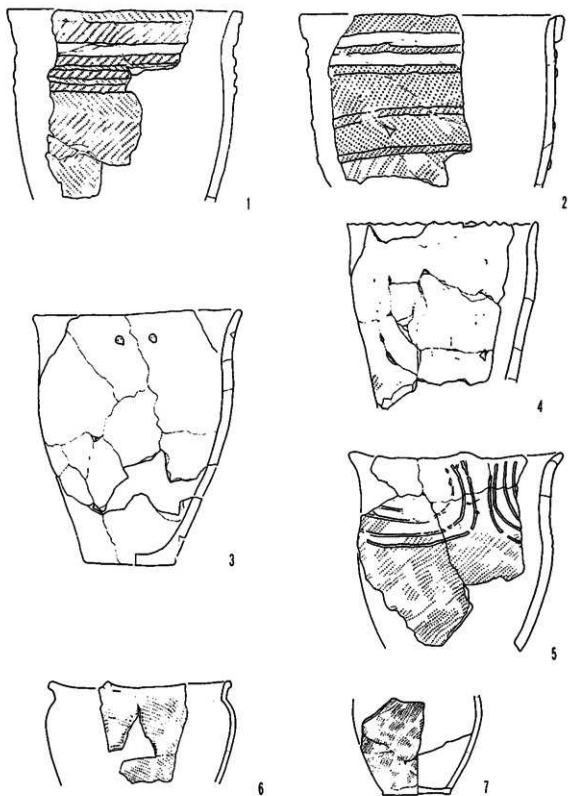


83

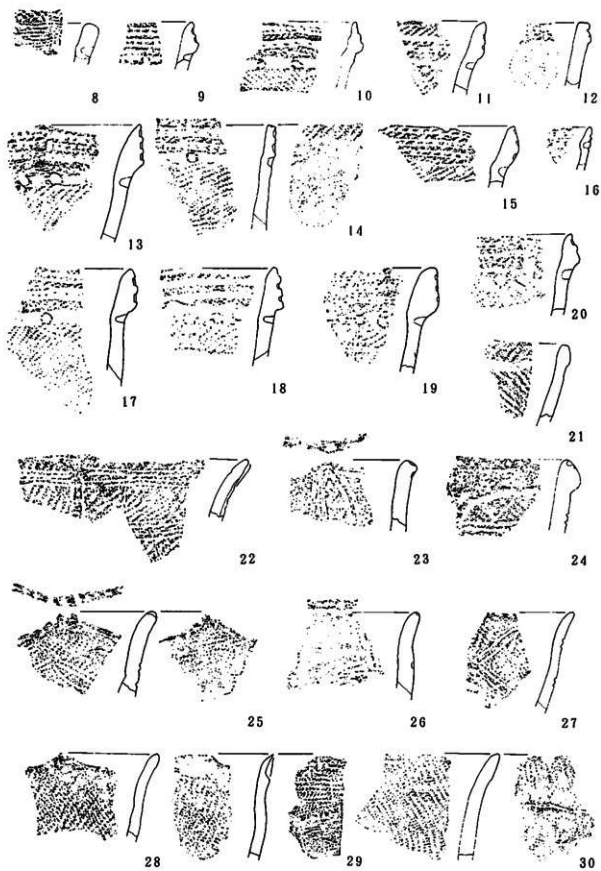


84

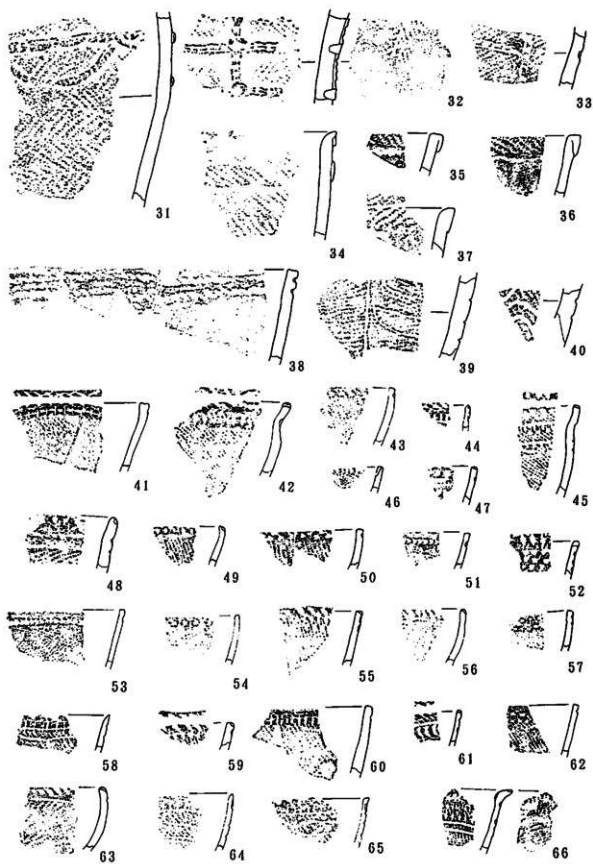
第41圖 包含層出土の遺物(11)



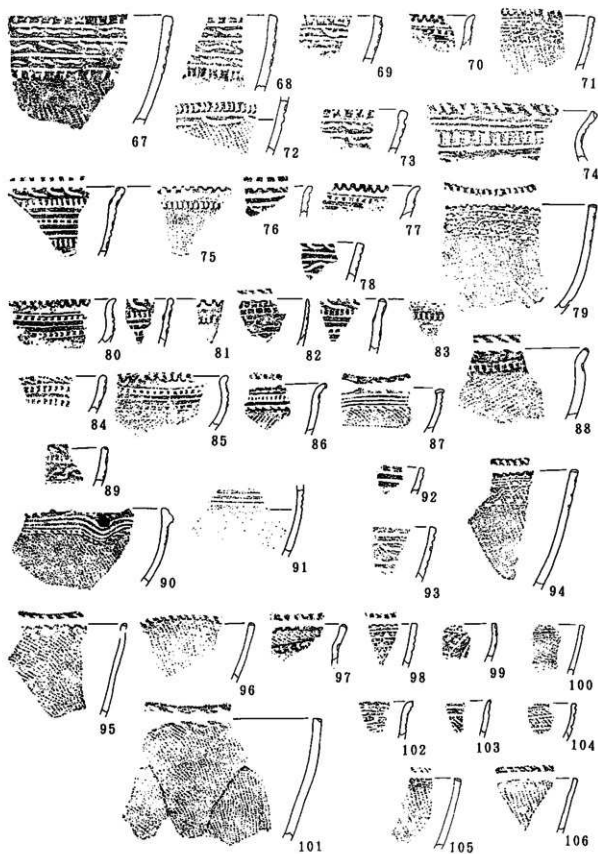
第42図 表土層および盛土出土の遺物(1)



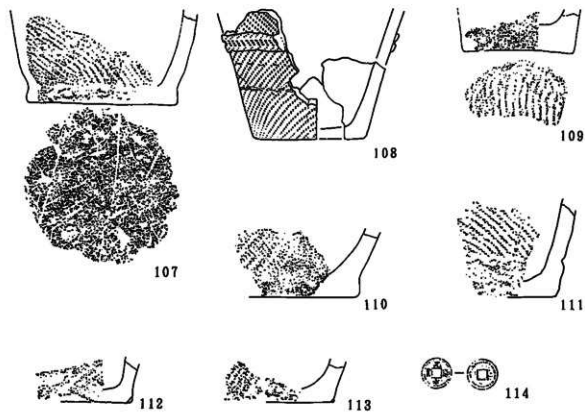
第43図 表土層および盛土出土の遺物(2)



第44図 表土層および盛土出土の遺物(3)



第45図 表土層および盛土出土の遺物(4)



第46図 表土層および盛土出土の遺物(5)

第Ⅳ章 ま と め

黒川砂丘上に立地する大谷地貝塚遺跡の全体像を把握すべく調査してきたが、当時の汀線とともに貝塚、そして背後に集落のあることが判明した。

しかし、トレンチ調査であるため、住居跡、貝塚の規模を正確に計測することは不可能であり、全面発掘に委ねるしかない。

今回の調査とともに、過去の発掘調査場所がどこであるのかを検討してみると、記録の残る五十嵐織の場合には、図面、風景写真から貝塚SM-1から9トレンチ周辺の広範囲で遺跡中央を横切る町道の北部と思われる。また14、19トレンチにおいて南北に走る新しい溝があり多量の縄文時代晩期の土器片が混入しており、下水溝に相当する可能性もある(注1)。

歴史的な環境をみると大正時代～昭和時代戦前までは貝塚が盛り上がり一面白色を呈していたようであるが戦後は低湿地の埋立て、果樹園栽培などで大きく変貌したことがわかり貝塚の一部は大きく削ぎ取られてしまったと言えるが、現在においても周辺の住宅化が進行する中、この一帯が残存していることは非常に貴重と言えるだろう。

遺構においては縄文時代中期の第Ⅱ群土器(北筒式)に伴うと思われる住居跡、墓壇、貝塚(SM-5)、後期の第Ⅲ群土器の貝塚群は混土貝層(SM-1)と混貝土層(SM-2~4)があり、従前は前者がよく知られていたものであり、後者はあまり注意されていなかったと言える。それは前者が保存状態がよく、後者は消失してしまったことが大きな要因と考えられる。恐らく貝塚には常に両者が存在し、貝類主体、魚骨主体の捨場の量的差が存在したのと思っている。

貝塚の貝類構成はコタマガイ、イガイ類などが主体となる海性貝類で、発掘においては貝種ごとにまとまりをもっていることから採集の規模が予測されるところである。サンプリング分析したのは、混土貝層のSM-1のみであるが、魚類では圧倒的にニシンが多く、ホッケ、カレイ等が続き、それらにアシカ、オットセイ、トド類の海獣が加わるように、あまり陸獣を対象としていなかったようである。今後、他の混貝土層(SM-2~5)との比較をすることによって、季節性、年代差などに追れるものと考えられる。

貝塚における植物遺体についてはヤマブドウの種子が見られることから動物遺体とともに注意すべき点と思われる。いずれにしても貝塚出土遺体の同定、数量分析は多大な時間と労力が必要であり今後の課題としたい。

貝塚の性格については、現代的にみると単なるゴミ捨て場の存在であるが、使用できる骨角器や人骨の出土例を考えると河野広道が指摘した送り場としての見解は説得力をもつように思われるが貝塚の全てが一緒かという点については一考を要しよう。

土器については6群に分けたが、縄文時代中期後半から晩期にかけてのもので長期間にわたり生活していたと言える。

かつて大谷地貝塚を調査した報告で気づくことは、清野謙次以外に縄文晩期土器群にはほとんど記していないことである。五十嵐織も詳細な報告をしているが中期から後期のみを記述を中心としている。多分、昭和時代の初期には縄文時代晩期から続縄文時代にかけての遺物包含層はかなり開墾が進み失われていたのであろう。

第Ⅰ群土器はこの遺跡において最も古いもので、黒川砂丘の形成を考える上で重要である。第Ⅱ群土器はあまり余市町内で見られないもので、登町2遺跡の土器と類似し、北筒式（トコロ6群）に併行するが道央地帯に分布する特有の土器である。今回の調査で多量に出土しているが、かつての調査ではあまり出土していないようである。

第Ⅲ群土器は所謂「余市式土器」であり、大谷地貝塚の標準土器として注目を浴びているものである。五十嵐鐵は貝塚を層位的に調査し、第1貝層、第1砂層、第2貝層、第2砂層ごとに土器文様や器形を比較してその変遷をまとめており、余市式編年の基礎文献となっているが、土器の写真や図の掲載が少ないために、文章だけでは十分に咀嚼することができず、不鮮明さを醸し出している。余市式はバラエティがあるため細分を試みているが未だに一致した見解はなく、今回の調査により層位的変遷の立証を期待したが、第Ⅱ群との時間差は確実ながら第Ⅲ群土器各種の層位的変遷を明らかにすることはできなかった。しかし貝塚での共伴資料を基準として他遺跡との資料を一つ一つ検討することによって大枠の編年は可能になるだろう。第Ⅳ、Ⅴ群土器については少量であるが、町内で後期の遺跡が少ない中で注意すべきである。

石器については、石鏃、石槍などの尖頭器類が主体であり、狩猟、漁業に使用されたものと思われる。スクレイパーについては定形的なものではなくフレイクを選択して刃部を作成した程度のように思われる。円筒式土器に伴う石冠や石匙については出土例が無いことから第Ⅱ、Ⅲ群土器の頃には、使用されていない可能性がある。

32、36トレンチではフレイク集中跡（スポット）があり、黒曜石原石を搬入しての石器製作の場と考えられる。

骨角器については、精巧に製作された骨針が重要である。小さな目穴から植物繊維紐の存在が推測され、衣類等の縫針として使用されたものであろう。尖頭器についてはかなり使用していたらしく先端部の磨耗が激しい。アワビおこしや貝類の口あけ等に使用されたものであろう。

以上のように縄文時代中期後半から晩期にかけての遺物包含層や遺構が確認されたが、当時の環境としての様子を窺うことができる。東部の丘陵舌状突出部は岬と言えるものであり海岸がせまる波打ちぎわであり、砂丘上には集落、その間に貝塚が形成されたようである。

貝塚からは砂地に生息するコタマガイ、岩礁性のマガキ、アワビ、イガイなどの貝類が主体となっていることから、当時の海岸線は複雑であったようである。

現在の丘陵及び斜面ではカシワ、ホウノキ、ハンノキなどの落葉広葉樹林となっており、つる性のヤマブドウが多く見られるが、泥炭層からはハンノキ属、アサダ、クリとともに貝塚からヤマブドウ、そして土器底部にカシワ、ミズナラ類と思われる大形葉痕が見られることから、当時の集落周辺には林が形成されており、台石、擦石などによる植物性食物の加工なども行われていたことだろう。また、石器として石鏃や石槍が多いことは狩猟、漁業なども四季を通じて盛んに行われていたと思われる。

この遺跡周辺にはフゴッベ貝塚（縄文時代前期）、西崎山ストーンサークル（縄文時代後期）、フゴッベ洞窟（続縄文時代）などが存在することから、連続と古代人の営みがあり、余市町の古代史を語る上で重要な地域であったと言える。それは、まさしく古代史ゾーンと言えるだろう。

主な参考文献

- 五十嵐 鐵 1934 『大谷地貝塚之層位的研究』
- 岩崎隆人他 1970 『伊達山遺跡』
- 江坂輝弥・渡辺誠 1988 『装身具と骨角製漁具の知識』
- 大島直行他 1982 『札幌台地の縄文時代集落址一登別市千歳6遺跡発掘調査報告書』
- 大場利夫他 1965 「函館市郊外煉瓦台遺跡」『北方文化研究報告』20
- 大沼忠春 1981 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌』66-4
- 同 上 1988 「北筒式土器様式」『縄文土器大観』
- 小椋先史懇話会 1997 『大谷地貝塚と五十嵐鐵-余市式土器をめぐる』
- 菊地俊彦 1967 「札幌市平岸天神山出土の土器について」『北海道考古学』3
- 清野謙次 1969 「後志国余市郡余市町春部字大谷地貝塚」『日本貝塚の研究』
- 桑原護 1966 「北筒式土器」『考古学雑誌』51-4
- 同 上 1968 「余市式土器」『考古学雑誌』54-1
- 金子浩昌 1988 『骨角器の研究』
- 川内基 1988 「北海道の大木系土器」『北海道文化財研究所通信』10
- 河野常吉 1983 『河野常吉ノート~考古編2』宇田川洋校注
- 河野広道 1935 「北海道石器時代概要」『ドルメン』4-6
- 同 上 1959 「北海道の土器」『郷土の科学』23
- 高橋理 1996 「余市式再考」『北海道考古学』32
- 高橋正勝 1981 「北海道南部の土器」『縄文文化の研究』4
- 同 上 1981 「萩ヶ岡式土器の設定」『萩ヶ岡遺跡』
- 豊原熙司 1981 「北海道東部の土器」『縄文文化の研究』4
- 名取武光 1939 「北海道の土器」『人類学先史学講座』
- フゴッペ洞窟調査団 1970 『フゴッペ洞窟』
- 北海道文化財研究所 1989 『茶津洞窟』
- 同 上 1992 『堀株1・2遺跡』
- 北海道埋蔵文化財センター 1989 『忍路工場遺跡・忍路5遺跡』
- 同 上 1990 『柴町5遺跡』
- 同 上 1990 『登町2遺跡・登町3遺跡』
- 同 上 1991 『フゴッペ貝塚』
- 峰山巖他 1987 『噴火湾沿岸貝塚遺跡報告2 高砂貝塚』
- 宮夫靖夫 1984 「II B層の遺構と遺物について」『タブコブ』
- 森田知忠 1981 「北海道」『縄文土器大成-後期』3
- 吉崎昌一 1965 「縄文文化の発展と地域性-北海道」『日本の考古学』II
- 渡辺誠 1973 『縄文時代の漁業』



第47図 大谷地貝塚出土土器の変遷 (II~IV群土器)

大谷地貝塚出土の貝類・フジツボ類・ウニ類・魚類

新美倫子

はじめに

大谷地貝塚の調査では貝層が5ヵ所で検出されており、それらの所属時期は全て縄文時代中期末～後期初頭である。これらの貝層は全て20cm×20cmの小グリッド別に土ごと取り上げられ、それぞれ2mm目の篩でふるった後に動物遺存体が選別された。貝類については、巻貝は芯の残存している個体を、二枚貝は殻頂部の残存している個体を選び出し、魚類については全資料が抽出された。フジツボ類・ウニ類の破片や棘も全て抽出されている。これらは非常に多量となったために、今回の報告書で全量を分類して内容を示すことは時間的に不可能であった。そこで、20トレンチの小グリッド12ヶ所(P-17・18、Q-13・14・17・18、R-13・14・24・25、S-24・25)から出土した資料の内容を定量的に分析することとし、これらの小グリッド以外の地区から出土した貝類・魚類資料については、出土した種名のみを報告することにした。表1に出土した動物種名を、表2～4に出土量を示した。なお、この資料の同定にあたって国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生にご教示をいただいた。また、余市町教育委員会の乾芳宏氏にはこの資料を分類する機会を与えていただいた。ここに感謝いたします。

1、貝類(表2)

貝類では種を同定できた資料は412点であった。このうちコタマガイが221点と半分以上を占めており、次に多いイガイ類の142点と合わせると8割以上になる。この2種は最小個体数で見ても、全体の8割程度を占めている。コタマガイは殻長5～6cmの個体が多いが、小型の個体では保存状態が極めて悪いため左殻・右殻の区別がよくわからないものも見られた。イガイ類は細かく割れており殻頂部のみが残存していたが、その大きさから見てよく成長した大型の個体が多く、また半数近い個体が焼けていた。

その他の種の出土量は少ない。ムラサキインコは14点出土し、焼けた個体も見られた。マガキは左殻が4点見られ、全てよく成長した大型の個体であった。イボニシ類は4点出ており、いずれも殻高4cm程度である。コベルトフネガイは全て殻長2.8cm以下の個体であり、その大部分はごく小さな幼貝であった。アワビ類9点も全て幼貝である。これらの幼貝は食料として採集されたのではなく、他のものに混じって遺跡に持ち込まれたのであろう。他にムギガイ類が3点、カサガイ類・エゾチヂミボラ・ヨウラクガイ類・オオヘビガイがそれぞれ1点ずつ出土した。表2で種不明としたものは、幼貝を除けば保存状態が悪いために種を決定できない資料である。

なお、分析した小グリッド以外の地点から、クボガイ類・ツメタガイ・ヒレガイ・ヤマトシジミ・ウバガイが少量と、ホタテガイ?の破片が出土している。

2、フジツボ類

全ての小グリッドで破片が少量ずつ出土した。破片の形状から見て、チシマフジツボなどが含まれていると思われる。

3、ウニ類 (表2)

ほとんどの小グリッドから棘と殻破片が少量ずつ出土している。これらの多くはキタムラサキウニのものであるが、エゾバフンウニもわずかに見られた。

4、魚類 (表3・4)

魚類の出土量は多く、種を同定できた資料は6746点にのぼった。表3に椎骨の出土量を示し、表4に椎骨以外の部位の出土量を示した。なお、椎骨については1/2~2/3程度以上残っているものについて種を同定し、それ以下のものは同定不可の椎骨破片として数量だけを数えている。

ニシン類が最も多く出土し、表3の椎骨出土量で見ると4800点と同定可能な資料の80%程度を占めている。次いで多く出土したのがホッケの550点とカレイ類の436点であり、これらをあわせると96%にのぼる。これら3種は椎骨以外の部位の出土量も多く、ニシンは表4でも種同定できた資料の84%を占め、ホッケ・カレイ類をあわせると95%となる。ニシン類には椎骨の形状から見てマイワシなどのイワシ類も少量含まれているが、その大部分はニシンである。ニシンの耳石も624点と多量に出土している。椎骨の大きさで見ると、体長10cm台の小型の個体から30cm以上の大型の個体まで様々な大きさの個体が出土しているが、小さなものは少なく、20cm台後半から30cm程度のもが多い。30cm以上と思われる個体もかなり見られ、春の産卵期に接岸した個体が多く利用されていると考えられる。ホッケも体長35cm程度から40cmを超える大きな個体が多く見られた。これらは秋の産卵期に接岸したものであろう。カレイ類には椎骨や上顎骨・歯骨等にいくつかのタイプが見られ、数種類のカレイが含まれていると思われる。体長20cmほどの小さな個体も見られるが、30~50cm程度のもが多い。

ニシン類・ホッケ・カレイ類以外には、以下に述べる種が出土した。ウグイ類は小型のウグイタイプと大型のマルタタイプの両方の椎骨があわせて75点見られ、大型のものの方が多く出ている。サケ類は各小グリッドで椎骨の破片が少量ずつ出土しているが、P-18グリッドでは完型あるいはほぼ完型の椎骨が30点まとまって出土した。大部分の椎骨と椎骨破片はシロザケタイプのものであったが、小型のマスタイプのものも少量見られた。アイナメ類は体長10cm台後半から40cm以上のものまでいろいろな大きさの個体が出ているが、30cm以上のものが多い。ヒラメも体長30cmほどの小型の個体から1m程度の大きな個体まで見られたが、大型のものが多かった。ツノザメ類は椎骨と棘が見られ、カサゴ類は全て体長30cm以上の個体である。

ホシザメは椎骨が3点出ており、サバ類は小型の椎骨が1点と体長30cm台の個体の椎骨・上顎骨が1点ずつ出土した。ブリは体長1m以上と思われる大きな個体の前上顎骨

と歯骨が見られた。オヒョウも大型の個体の椎骨が1点出土している。カジカ類は体長23 cmほどの個体の上顎骨が1点、ホウボウ類は体長28 cm程度の個体の椎骨が1点出土し、ボラ類とフグ類は小型の椎骨が1点ずつ見られた。なお、出土量を示した小グリッド以外の地区からは、イタチザメの歯が1点出土している。

まとめ

本遺跡では貝類は比較的少ないが、魚類が非常に多く出土した。貝類ではコタマガイとイガイ類が多く利用されていることから、遺跡の人々は砂泥性の海岸と岩礫性の海岸の両方を利用していたと思われる。魚類ではニシン類が主体となっており、次いでホッケとカレイ類が多く出ている。ニシンとホッケは共に大型の個体が多い。これらは、ニシンは春、ホッケは秋の産卵のために接岸した個体群が主として利用されていると考えられる。このような魚類の利用パターンは、ニシンとホッケの産卵群が回遊してくるという条件に恵まれた、縄文時代後期初頭のこの地域の特徴であろう。

表1 出土動物種名

I 貝類

1. アワビ類
2. カサガイ類
3. クボガイ類
4. オオヘビガイ
5. ツメタガイ
6. ヒレガイ
7. ヨウラクガイ類
8. エゾチヂミボラ
9. イボニシ類
10. ムギガイ類
11. コベルトフネガイ
12. ムラサキインコ
13. イガイ類
14. ホタテガイ?
15. マガキ
16. ヤマトシジミ
17. コタマガイ
18. ウバガイ

II フジツボ類

1. チシマフジツボ

III ウニ類

1. エゾバフンウニ
2. キタムラサキウニ

IV 魚類

1. ホシザメ
2. イタチザメ
3. ツノザメ類
4. ニシン類
5. サケ類
6. ウグイ類
7. ボラ類
8. プリ
9. サバ類
10. カサゴ類
11. アイナメ類
12. ホッケ
13. カジカ類
14. ホウボウ類
15. ヒラメ
16. オヒョウ
17. カレイ類
18. フグ類

表2 貝類出土量

種 地区	コタマガイ		イガイ類			ムラサキインコ			マ ガ キ	イ ボ ニ シ 類	コ ペ ル ト フ ネ ガ イ		ア フ ビ 類 幼	ム ギ ガ イ 類	そ の 他	ウ ニ 類	
	L	R	LR?	L	R	LR?	L	R			LR?	L					R
	P-17	15	9		3	2		2	1								+
P-18	18	22	2	11	11	3			1						カサガイ類1、 種不明巻貝1、(幼)1	+	
Q-13	13	6		11	10					2				3	種不明巻貝(幼)2、 種不明二枚貝R1	+	
Q-14	1	7		5	7	1			1	3					エソチヂミボラ1、 ヨウラクガイ類1、 種不明巻貝(幼)1	+	
Q-17	4	5	3	2	3		1		1			1				+	
Q-18	12	8	4	2	4			1	1			4			種不明巻貝(幼)1	+	
R-13	2	2		5	4					1						+	
R-14	1	4		2	1				1							+	
R-24	11	10	1	2	9	1					1	1			種不明巻貝2	+	
R-25	18	20		2	6		4	1			1	3			オオヘビガイ1、 種不明二枚貝(幼)L1、R1	+	
S-24	6	6	2	4	4						1	1					
S-25	4	5		14	13			1			1	2	1	1	種不明巻貝(幼)2、 種不明二枚貝L1	+	
計	105	104	12	63	74	5	7	6	1	4	4	6	4	9	4	18/426	

註 幼：幼貝、L：左殻、R：右殻。 +：ごく少量出土。

表3 魚類出土量(椎骨)

地区	ニシン類	ホッケ	カレイ類	ウグイ類	サケ類	アイナメ類	ツノザメ類	ヒラメ	その他	種不明	同定不可
P-17	278	31	28	1	5		1		ホウボウ類1	6	34
P-18	780	95	51	12	33	3	3		サバ類2、ボラ類1	4	64
Q-13	352	57	26	6	2.5		1			6	39
Q-14	234	14	7	1	1.5	2		1		2	41
Q-17	292	51	17	5	0.1	4	2			8	63
Q-18	616	46	30	10	2.5	5		5		9	78
R-13	217	32	21	2	0.1	3		1		3	30
R-14	202	39	35		0.5	3				2	22
R-24	528	71	25	7	2.5	5		1		1	53
R-25	560	47	102	17	0.5	7	5	3	ホシザメ2、オヒョウ1、 カサゴ類1	1	58
S-24	270	33	25	1	1.1	4			アグ類1	2	34
S-25	471	34	69	13	2	4	6		ホシザメ1、カサゴ類1	2	60
計	4800	550	436	75	51	40	18	11		11	46/6038

註 サケ類の出土量は椎骨破片も椎骨数に換算している。

表4 魚類出土量(椎骨以外)

種 地区	ニシン	カレイ類	ホッケ	ヒラメ	カサゴ類	その他
P-17	耳石28	maxL1 artR1、quL1 第一血管間棘1				ウグイ類咽頭歯fr1
P-18	耳石184 quR2 opL1	maxR1 denL1 quL2 鋤骨1 第一血管間棘1	pmaR1 maxL1、R2 denL1 artR1 quR1 鋤骨1	artR1	quR1	ウグイ類咽頭歯fr3 サバ類maxL1
Q-13	耳石27 denL1、R1	denL1 artL1	pmaR1 maxL2、R1 quR1			
Q-14	耳石4					ツノザメ類棘1
Q-17	耳石34	鋤骨1	maxR1 denL1、R1			アイナメ類 maxR1、denR1 ウグイ類咽頭歯fr1
Q-18	耳石97	pmaL1 maxL1 artL1 quL1、R1 opL1、鋤骨1	pmaL1、R1 maxR1 denL3 鋤骨1	maxR1 artR1		カジカ類maxL1 ウグイ類artR1、 咽頭歯fr4 サケ類歯1
R-13	耳石34 artR1	artL1、opL1 第一血管間棘1				
R-14	耳石12 artL2	第一血管間棘2		quL1 opL1		
R-24	耳石35	第一血管間棘2	maxR1			ウグイ類咽頭歯fr1
R-25	耳石97 denR1 quL1、R1 opL1、R1	maxL4 denL1、R1 artR3 quL2、R1 鋤骨1	pmaL1 maxL1 denL3 quL1	pmaR1 popL1	quR1	ブリpmaL1
S-24	耳石14	maxL1 第一血管間棘2	denR1		pmaL1	アイナメ類maxR1 ブリdenR1
S-25	耳石58	maxR1、denL1 quR2、鋤骨1 第一血管間棘2	quL1	maxR1 denR1 artR1	denR1 opR1	
計	637	50	32	10	5	20/754

註 pma: 前上顎骨、max: 上顎骨、den: 歯骨、art: 関節骨、qu: 方骨、
pop: 前鰓蓋骨、op: 鰓蓋骨、fr: 破片、L: 左側、R: 右側。

大谷地貝塚出土の鳥類・哺乳類

西本 豊 弘

大谷地貝塚の1997年の発掘調査で出土した鳥類・哺乳類の骨は、表1に示したとおりである。鳥骨の出土量は少なく、アホウドリ類が確認されただけである。このアホウドリの骨は21トレンチから出土したもので、中手骨の破片のため種は不明である。哺乳類は、陸獣の出土量は少なく、海獣類が多かった。確認された種は、ウサギ類・エゾシカ・キツネ・オットセイ・ニッポンアシカ・トド・イルカ類・クジラ類・ヒトである。なお、これらの骨の他に、現在のニワトリとネズミ類の骨が多量に出土したが、それらは記載していない。この遺跡の一部にニワトリ小屋が作られており、現在のニワトリの遺骸が遺跡内に混入したと推測されるからである。また、ニワトリ小屋があったためにネズミ類の骨も多かったであろう。

さて、遺跡から採集された動物遺体の内容であるが、まずウサギは14トレンチから出土した大腿骨が1点だけであった。飼うウサギが混入した可能性もあるのでウサギ類としておきたい。キツネも20トレンチS18区で出土した下顎骨が1点だけであった。エゾシカは、20トレンチP18区で出土した中手骨または中足骨の遠位部破片のみエゾシカと確認された。おそらくエゾシカの破片と思われる陸獣骨片もその他に1点しかなく、エゾシカが少ないことは意外であった。陸獣狩猟があまり行われていなかったのであろうか。

獣骨の多くは海獣骨であり、アシカ科の骨が大部分であった。この地域に分布するアシカ科のオットセイ・ニッポンアシカ・トドの3種はすべて確認された。アシカ科の骨の出土量は少ないが、3種とも含まれていたことから、この遺跡でアシカ類狩猟を行っていたことは明らかである。イルカ類・クジラ類の骨も少量出土している。なお、アザラシ類は確認できなかった。

表1 出土動物遺体の内容

出土地区	内 容	備 考
20T B7	海獣骨片2	SM-1
20T BC6	アシカ類指骨1	◇
20T D2	イルカ椎骨1	◇
20T D4	骨片1	◇
20T I5	海獣中手/中足骨1	◇
20T O9	海獣肋骨1	◇
20T P10	骨片4	◇
20T P13	海獣骨片1	◇
20T P13	骨片1	◇
20T P14	海獣骨片1、陸獣骨片1	◇
20T P16	骨片1	◇
20T P17	海獣骨片1	◇
20T P18	シカ中手/中足骨遠位部1、海獣骨片8	◇
20T P22	骨片18	◇
20T P22	海獣椎骨1	◇
20T P23	海獣肋骨1、海獣中手/中足骨1	◇
20T P27	骨片1	◇
20T P3	海獣肋骨2、海獣骨片2	◇
20T P5	海獣骨片1	◇
20T Q12	海獣骨片1	◇
20T Q15	海獣骨片1	◇
20T Q16	海獣骨片1	◇
20T Q17	海獣指骨1	◇
20T Q17	トド雄踵骨右1、距骨右1	◇
20T Q18, Q19	トド雄大腿骨右成獣1、トド雄足根骨1、海獣中手/中足骨2、海獣指骨1、海獣椎骨1、海獣骨片2	◇
20T Q2	海獣骨片1	◇
20T Q23	海獣中手/中足骨1、海獣骨片4	◇
20T Q25	骨片2	◇
20T Q5	海獣骨片1	◇
20T QR17, QR18	トド雄成獣踵骨左1、距骨左1、アシカ雄成獣踵骨右1、海獣指骨1、海獣骨片1	◇
20T R13	海獣肋骨1	◇
20T R15	海獣骨片3	◇
20T R16	海獣指骨1	◇
20T R17	海獣骨片10	◇
20T R24	アシカ雄?距骨左1、海獣中手/中足骨1	◇
20T R4	海獣骨片3	◇
20T S14,15,16	アシカ類肋骨1	◇
20T S15	海獣指骨1	◇
20T S16	海獣骨片3	◇
20T S17	イルカ頭蓋骨1	◇
20T S17,18	オットセイ雄尺骨左1 後面は切断されている	◇
20T S18	キツネ下顎骨左成獣1	◇
20T S23	海獣骨片5、小型陸獣指骨1	◇
20T S25	海獣骨片2	◇
20T S4	海獣歯1	◇

出土地区	内 容	備 考
20 T B	海獣骨片 5	SM-1
20 T 土器西	アシカ雄距骨左 1	◇
20 T 表土	アシカ雌? 脛骨右若獣 1、海獣椎骨 2、海獣骨片 5、海獣指骨 2、 オットセイベニスポン 1 未加工	◇
20 T 表土	アシカ雄寛骨左 1 成獣、海獣中手/中足骨 1、海獣椎骨 3	◇
14 T A 14	ウサギ大腿骨 1、オットセイ雄上腕骨近位部のみ 1 若獣、 アシカ類歯 2、海獣骨片 2 5	SM-2
14 T C 14	海獣肋骨 1	◇
14 T	種不明大型鳥類尺骨片 1	◇
15 T A 16	種不明鳥類大腿骨右 1	SM-4
15 T C 3	海獣指骨 1	◇
15 T 表土	アシカ雄脛骨左下 1 成獣、海獣肋骨破片 1、海獣椎骨 1、海獣破片 8	◇
15 T	海獣肋骨 1、海獣骨片 2	◇
15 T	海獣椎骨破片 1	◇
21 T	トド雄橈骨 1、クジラ骨片 1、海獣骨片 1	SM-5
21 T	アホウドリ中手骨右遠位部 1、ヒト上腕骨左遠位部 1 成人、 骨片 1、トリ破片 1	◇
21 T	海獣骨片 1	◇
21 T	海獣指骨 1、海獣犬歯 1、クジラ骨片 1	◇
21 T	海獣骨片 3 海獣中手/中足骨 1	◇
11 T	海獣肋骨 1	
19 T	海獣中手/中足骨 2、海獣骨片 1	

付篇 3

大谷地貝塚出土の種子

20トレンチ内の小グリットを2mmの篩でふるった際に種子が採取できたために椿坂恭代氏(北海道大学遺跡調査室)に同定をお願いした。その結果は下記の通りである。

なお、炭化米については今後詳細な分析をしていきたい。

大谷地貝塚遺跡出土植物遺体表 縄文中期～後期初頭

トレンチ	サンプル採取区	イネ (粒)	タデ層 (粒)	ブドウ層 (粒)
20	B-1			3
20	C-1	1		1
20	C-3			1
20	D-5		1	1
20	D-14			14
20	P-8			1
20	P-19			1
20	R-17			1
20	S-16			1
20	S-17			1
20	S-18			1
20-B	D-2			5
合 計		1	1	31

イネ*Cryza sativa* Lは炭化しており、タデ層*Polygonum* L、ブドウ層*VITIS* Lは未炭化の状態で出土。

付篇 4

発掘区出土の自然木

包含層下の泥炭層から自然木が出土したため、三野紀雄氏(北海道開拓記念館)をお願いした。その結果は下記の通りである。

No.	トレンチ名	土 層	数量	種 名	備 考
1	15トレンチ	IV	1	広葉樹散孔材(アサグ?)	北筒式以前
2	◇	IV	1	◇	◇
3	◇	IV	1	ハンノキ層 <i>Alnus</i> sp.	◇
4	◇	IV	1	◇	◇
5	◇	IV	1	広葉樹散孔材(アサグ?)	◇
6	◇	IV	1	不 明	◇
7	11トレンチ	IV	1	クリ <i>Castanea crenata</i> .	◇

第1表 発掘調査トレンチ一覧

トレンチ名	調査面積	遺物数	自然遺物	備 考
			魚貝類(g)	
1	30㎡ (1 m×30m)	1		
2	30㎡ (1 m×30m)	136		
3	30㎡ (1 m×30m)	320		H-1
4	30㎡ (1 m×30m)	978		
5	20㎡ (1 m×20m)	45		
6	20㎡ (1 m×20m)	263		
7	30㎡ (1 m×20m)	1,303		P-1
8	20㎡ (1 m×20m)	506		厚く盛土が堆積
9	30㎡ (1 m×30m)	1,173	3.0	
10	30㎡ (1 m×30m)	268	16.0	
11	30㎡ (1 m×30m)	216	1.0	泥炭層より自然木
12	10㎡ (1 m×10m)	72		
13	10㎡ (1 m×10m)	59		
14	30㎡ (1 m×30m)	1,742	3688.2	SM-2・3
15	20㎡ (1 m×20m)	492	3221.2	SM-4/泥炭層より自然木
16	15㎡ (1 m×15m)	176		
17	15㎡ (1 m×15m)	146		
18	15㎡ (1 m×15m)	1,902	23.4	
19	24㎡ (1 m×24m)	2,642	585.8	F 6～8
20	27㎡ (1 m×20m + 1 m×7 m)	4,442	25296.5	SM-1/F 1～5
21	15㎡ (1 m×15m)	283	6481.8	SM-5
22	9㎡ (3 m×3 m)	978	11.0	
23	100㎡ (4 m×25m)	1	2332.0	盛土が厚く堆積
24	80㎡ (4 m×20m)	17		◇
25	80㎡ (4 m×20m)	118		◇
26	80㎡ (4 m×20m)	0		◇
27	80㎡ (4 m×20m)	6	0.2	◇
28	4㎡ (1 m×4 m)	0	6.0	岩盤
29	10㎡ (1 m×10m)	431		
30	25㎡ (1 m×25m)	1,860		H-2
31	10㎡ (1 m×10m)	98		S-1
32	10㎡ (1 m×10m)	3,223		S-2
33	10㎡ (1 m×10m)	54		
34	15㎡ (1 m×15m)	1,017		H-3・4/P-2
35	30㎡ (1 m×30m)	93		
36	30㎡ (1 m×30m)	437		S-3
37	20㎡ (1 m×20m)	0		厚く盛土が堆積
38	15㎡ (1 m×15m)	0		◇
39	15㎡ (1 m×15m)	38		◇
40	15㎡ (1 m×15m)	1		◇
合計	1,119㎡	25,537	41,666.1	

第2表 出土遺物一覧

トシ	表土・盛土						包合層						小計	合計
	土器	銅片	鏃	石器	その他	小計	土器	銅片	鏃	石器	その他			
1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	
2	3	10	0	0	0	13	105	13	5	0	0	123	136	
3	63	0	0	0	0	63	140	78	33	2	4	257	320	
4	12	44	7	0	0	63	128	725	57	2	3	915	978	
5	8	17	2	0	0	27	6	6	4	2	0	18	45	
6	8	7	0	0	0	15	59	133	56	0	0	248	263	
7	36	639	2	0	0	677	112	470	36	6	2	626	1,303	
8	286	211	9	0	0	506	0	0	0	0	0	0	506	
9	540	125	31	0	0	696	396	56	40	3	9	477	1,173	
10	165	69	5	0	0	239	20	4	4	1	0	29	268	
11	0	0	0	0	0	0	100	59	41	9	7	216	216	
12	42	16	0	0	0	58	8	5	1	0	0	14	72	
13	41	17	1	0	0	59	0	0	0	0	0	0	59	
14	572	222	511	0	0	1,305	262	96	61	3	15	437	1,742	
15	187	69	7	0	0	263	93	50	29	1	56	229	492	
16	50	11	3	0	0	64	78	17	17	0	0	112	176	
17	18	11	0	0	0	29	40	67	7	0	3	117	146	
18	1,405	458	39	0	0	1,902	0	0	0	0	0	0	1,902	
19	1,059	427	12	0	0	1,498	861	171	87	21	4	1,144	2,642	
20	839	534	22	0	0	1,395	1,351	1,381	276	39	0	3,047	4,442	
21	190	63	0	0	0	253	18	9	3	0	0	30	283	
22	683	229	41	0	0	953	21	4	0	0	0	25	978	
23	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	
24	5	0	12	0	0	17	0	0	0	0	0	0	17	
25	79	19	20	0	0	118	0	0	0	0	0	0	118	
26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
27	4	1	1	0	0	6	0	0	0	0	0	0	6	
28	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
29	113	51	9	0	0	173	177	78	3	0	0	258	431	
30	696	226	34	0	0	956	688	177	34	2	3	904	1,860	
31	27	7	1	0	0	35	43	19	0	1	0	63	98	
32	40	47	5	0	0	92	15	3,115	1	0	0	3,131	3,223	
33	22	18	0	0	0	40	9	5	0	0	0	14	54	
34	82	44	4	0	0	130	517	342	21	0	7	887	1,017	
35	20	4	3	0	0	27	56	5	5	0	0	66	93	
36	23	393	2	0	0	418	15	4	0	0	0	19	437	
37	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
38	34	1	3	0	0	38	0	0	0	0	0	0	38	
39	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	
40	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
計	7,353	3,990	787	0	0	12,130	5,291	7,089	822	92	113	13,407	25,537	

第3表 遺物計測一覧 (遺構出土の土器)

図No.	種別	トレンチ・小グリット		計測 (cm)			出土層	備考
				口径	底径	器高		
24図1	Ⅱ群	20B	4-D	(38)		(64)	貝塚	SM-1 胴部
	◇	20	R-13		11.8		◇	◇ 底部
2	◇	20	G-1	(21)		(20)	◇	◇
3	◇	20	P-2	(21)	(16)		◇	◇
4	◇	20	P-7	(30)		(42)	◇	◇
25図1A	◇	20	S-29	(29)		(13.5)	◇	◇
2A	◇	20	S-22				◇	◇
9	◇	14					◇	SM-2
10	◇	14					◇	◇
11	Ⅱ群	3		17.4		(24.1)		H-1
12	◇	3			12.8	15		◇
13	◇	3						◇ 胴部破片・羽状縄文
14	◇	3						◇ 押引有
15	◇	3						◇
16	◇	3						◇
26図1	◇	30						H-2 刺突文有
2	◇	30						◇
3	◇	30						◇ 押引有
4	◇	30						◇
5	◇	30						◇
6	◇	30						◇ 貼付に押引
7	◇	30						◇
8	◇	30						◇ 羽状縄文と押引き
9	◇	34						H-3
10	◇	34						◇
11	◇	34						◇
12	◇	34						H-4 沈線有
13	◇	34						◇
14	◇	34						◇
27図4	◇	34						◇
5	◇	34						P-2
6	◇	34						◇
7	◇	34						◇ 押引き有
8	◇	34						◇

遺物計測一覧 (遺構出土石器)

図No.	種 別	トレンチ・小グリット	計 測 (mm)			重さ (g)	石質・材質	備 考
			長さ	幅	厚さ			
25図3	石 鏃	20 ・ F-1	31	11	5	1.3	黒曜石	SM-1
4	◇	20 ・ R-10	33	11	4	1.4	◇	◇
5	◇	20 ・ S-13	30	11	5	1.5	◇	◇
6	◇	20 ・ S-19	48	20	11	7.8	◇	◇
7	◇	20 ・ S-23	35	13	4	1.8	◇	◇
8	◇	20 ・ Q-12	37	12	4	1.7	◇	◇
26図15	剥 片	7	29	20	2	0.9	◇	P-1 板 土
16	◇	7	12	17	12	3.3	◇	◇
17	◇	7	32	18	4	1.8	◇	◇
18	◇	7	23	20	4	0.8	◇	◇
19	◇	7	20	23	4	1.3	◇	◇
20	◇	7	22	18	2	0.8	◇	◇
21	◇	7	26	29	3	1.7	◇	◇
22	◇	7	24	22	3	1.6	◇	◇
23	◇	7	32	32	6	4.4	◇	◇
24	◇	7	36	29	4	3.2	◇	◇
25	◇	7	24	21	2	1.1	◇	◇
26	◇	7	29	18	5	2.4	◇	◇
27図1	◇	7					◇	◇ 接合資料
2	◇	7					◇	◇ ◇
3	◇	7					◇	◇ ◇
9	台石・擦石	31	266	196	110	7,760	安山岩	S-1
10	◇	7	214	152	48	3,400	チャート	◇
28図1	◇	7	240	180	25	3,420	安山岩	◇
2	◇	7	276	230	110	8,630	◇	◇
3	剥 片	32	45	25	6		黒曜石	S-2
4	◇	32	40	36	9		◇	◇ 接合資料
5	◇	32	26	30	9		◇	◇ ◇
6	◇	32	41	23	10		◇	◇
7	◇	32	45	35	19		◇	◇
8	◇	32	32	40	10		◇	◇
29図1	◇	32	46	24	6		◇	◇
2	◇	32	45	23	8		◇	◇
3	石 核	32	41	39	14		◇	◇
4	◇	32	38	42	18		◇	◇
5	◇	32	25	46	11		◇	◇
6	剥 片	32					◇	◇ 接合資料

遺物計測一覧 (遺構出土の石器・骨角器)

図No.	種別	トレンチ・小グリット	計測 (mm)			重さ (g)	石質・材質	備考
			長さ	幅	厚さ			
29図7	剝片	36	55	37	6		黒曜石	S-3
8	◇	36	48	35	10		◇	◇
9	◇	36	50	41	19		◇	◇
10	◇	36	80	46	9		◇	◇ 接合
11	◇	36	62	55	9		◇	◇ ◇
30図1	銛	20 ・ P-18	(5)	6	2		海獣骨	SM-1
2	◇	20 ・ O-11	50	7	2		◇	◇
3	針	20 ・ G-4	53	4	2	0.6	陸獣骨	◇
4	◇	20 ・ G-4	17	2	2		◇	◇
5	◇	14 ・ A-17	42	4	3	0.6	◇	◇
6	離頭銛	20 ・ Q-9	55	9	4	2.1	海獣肋骨	◇
7	尖頭器	20 ・ Q-18	192	17	8	32.7	トド骨	◇
8	◇	20 ・ O-7	197	14	9	28.9	海獣骨	◇

遺物計測一覧（包含層出土の石器）

図No.	種類	石質	土層	計測(mm)			重量(g)	トレンチ名
				長さ	幅	厚さ		
36図No. 1	石鏃	黒曜石	Ⅱ	30	15	5	1.3	20
2	◇	◇	◇	33	13	4	1.5	20
3	◇	◇	Ⅲ	28	12	5	1.2	20
4	◇	頁岩	◇	31	10	4	1.3	◇
5	◇	黒曜石	◇	26	12	3	0.7	◇
6	◇	◇	Ⅱ	35	13	6	1.8	◇
7	◇	◇	◇	35	12	6	1.8	◇
8	◇	◇	Ⅲ	20	12	3	0.7	◇
9	◇	◇	◇	23	11	3	0.8	◇
10	◇	◇	◇	31	12	6	1.9	19
11	◇	◇	◇	34	15	5	1.7	◇
12	◇	◇	◇	24	12	4	1.0	◇
13	◇	◇	◇	24	20	4	1.0	9
14	◇	◇	◇	31	15	4	1.6	11
15	◇	◇	◇	19	11	3	0.6	11
16	◇	◇	◇	31.4	14.9	4.2	1.3	30
17	◇	◇	◇	30	15	4	1.1	14
18	◇	◇	◇	21	12	4	0.8	14
19	◇	◇	◇	30	18	4	1.9	5
20	◇	◇	◇	38	10	6	2.7	19
21	石槍	◇	◇	42	19	6	4.0	20
22	◇	◇	◇	42	17	6	2.9	◇
23	◇	◇	◇	51	27	7	6.0	◇
24	◇	◇	◇	52	25	7	6.4	4
25	◇	◇	◇	56	27	8	8.4	◇
26	◇	◇	◇	60.6	23.9	6.9	8.3	30
27	◇	◇	◇	59.9	23.9	8.5	9.6	31ト表土
28	◇	◇	◇	53	27	8	9.1	19
29	◇	◇	◇	49	19	10	6.8	19
30	◇	◇	◇	62	25	8	9.5	◇
31	◇	◇	◇	56	24	8	8.8	◇
32	◇	◇	◇	67	21	8	9.8	20
33	◇	◇	◇	57	17	7	5.4	19
34	◇	◇	◇	64	34	7	18.6	◇
35	◇	◇	◇	70	25	8	12.4	7
36	◇	片岩	◇	47.2	15.2	3.2	3.1	20
37	スクレイパー	黒曜石	◇	40	22	8	5.6	◇

遺物計測一覧 (包含層出土の石器)

図No.	種類	石質	土層	計測(mm)			重量(g)	トレンチ名
				長さ	幅	厚さ		
36図No.38	スクレイパー	黒曜石	Ⅱ	58	33	4	7.8	20
39	◇	◇	Ⅲ	54	30	11	13.1	20
40	◇	◇	◇	50	25	11	13.4	20
37図No.41	スクレイパー	黒曜石	Ⅲ	58	22	7	6.4	19
42	◇	◇	◇	51	29	7	8.4	19
43	◇	◇	◇	52	27	5	7.4	5
44	◇	◇	◇	49	30	10	9.8	20
45	◇	◇	◇	76	39	19	38.9	19
46	◇	◇	◇	45	25	10	7.7	11
47	◇	◇	◇	36	24	7	5.8	20
48	石錐	◇	◇	42	11	1	5.8	19
49	◇	◇	◇	59	7	5	32	20
50	フレイク	◇	◇	48	32	7	8.7	20
51	◇	◇	◇	52	31	5	72	7
52	◇	◇	◇	47	45	7	11.3	7
53	◇	◇	◇	64	17	6	7.4	19
54	コア(石核)	◇	◇	51	44	14	33.5	7
55	◇	◇	◇	45	37	9	11.0	7
56	◇	◇	◇	34	20	6	3.7	20
57	◇	◇	◇	24	29	6	4.0	20
58	◇	◇	◇	36	33	12	12.0	20
59	◇	◇	◇	39	31	16	20.7	20
60	◇	◇	Ⅱ	41	27	18	17.6	20
61	◇	◇	◇	40	29	18	18.5	20
38図No.62	コア(石核)	黒曜石	Ⅲ	51	28	8	83	19
63	◇	◇	◇	42	37	36	42.0	19
64	◇	◇	◇	50	44	9	35.7	19
65	◇	◇	◇	34	19	11	7.9	11
66	◇	◇	◇	30	17	11	5.3	11
67	◇	◇	◇	40	17	5	2.8	10
68	◇	◇	◇	38	31	11	11.3	11
69	◇	頁岩	◇	65	39	13	30.9	9
70	石斧	片岩	◇	182	40	33	300.0	20
71	◇	◇	◇	151	1475.2	13	290.0	19

遺物計測一覧 (包含層出土の石器)

図No.	種類	石質	土層	計測 (mm)			重量 (g)	トレンチ名
				長さ	× 幅	× 厚さ		
39図No.72	石斧	片岩	Ⅲ	166	68	38	550.0	14
73	◇	◇	◇	50	32	9	24.1	20
74	◇	◇	◇	69	36	13	60.0	20
75	砥石	砂岩	◇	94	53	40	210.0	20
76	◇	◇	◇					19
39図No.77	砥石	安山岩	Ⅲ	187	60	77	1490.0	20
78	磨石	◇	◇	158	98	66	1245.0	20
39図No.79	磨石	安山岩	Ⅲ	127	76	35	435	11
80	◇	◇	◇	127	53	32	330	19
81	◇	◇	◇	134	76	37	550	7
82	◇	◇	◇	75	68	28	245	11
83	◇	◇	◇	113	68	28	245	11
84	◇	◇	◇	125	90	44	650	20

土器実測・拓本一覧(表土)

図No.	トレンチ名	分類	出土層	計測 (cm)			備考
				口径	底径	器高	
45図No.67	1 8	Ⅳ	I				口縁部
68	1 8	◇	◇				◇
69	1 8	◇	◇				◇
70	1 9	◇	溝状遺構				◇
71	1 8	◇	下水溝				◇
72	1 8	◇	◇				◇
73	1 8	◇	◇				◇
74	1 8	◇	◇				◇ 壺形土器
75	1 8	◇	◇				◇
76	1 8	◇	◇				◇
77	1 9	◇	溝状遺構				◇
78	1 8	◇	下水溝				◇
79	1 8	◇	◇				◇
80	1 9	◇	◇				◇
81	1 8	◇	◇				◇
82	1 8	◇	◇				◇
83	1 8	◇	◇				◇
84	1 8	◇	◇				◇
85	1 9	◇	溝状遺構				◇
86	1 8	◇	下水溝				◇
87	1 8	◇	◇				◇
88	1 8	◇	◇				◇
89	1 8	◇	◇				◇
90	1 8	◇	◇				◇
91	1 9	◇	I				◇
92	1 8	◇	下水溝				◇
93	1 8	◇	◇				◇
94	1 8	◇	◇				◇
95	1 8	◇	◇				◇
96	1 8	◇	◇				◇
97	1 8	◇	◇				◇
98	1 8	◇	◇				◇
99	1 8	◇	◇				◇
100	1 8	◇	◇				◇
101	1 8	◇	◇				◇
102	1 8	◇	◇				◇
103	1 8	◇	◇				◇

土器実測・拓本一覧

図No.	トレンチ名	分類	出土層	計測 (cm)			備考
				口径	底径	器高	
45図No.104	1 8	IV	I				口縁部
105	1 8	◇	◇				◇
106	1 8	◇	◇				◇
46図No.107	2 2	II	I		(9)	(15.7)	底部
108	1 8	III	◇		(13)	(12)	◇
109	3 6	II	◇			(12)	◇
110	2 2	◇	◇				◇
111	1 8	◇	◇				◇
112	2 2	◇	◇				◇
113	2 2	◇	◇				◇
114	7	寛永通宝	◇				



版



トレンチ状況 (第6トレンチ)



トレンチ状況 (上: 第9トレンチ、下: 第11トレンチ)



調 査 風 景 (第15トレンチ)



貝 塚 (第14トレンチ SM-2)

調 査 風 景 と 貝 塚



トレンチ状況 (第25トレンチ)



トレンチ状況 (第25トレンチ)

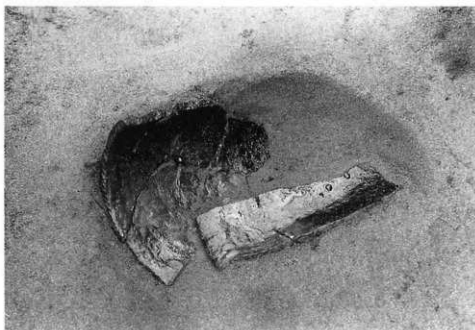
調査風景



貝 塚 (第20トレンチ SM-1) 状 況



貝 塚 (第20トレンチ SM-1) 状 況

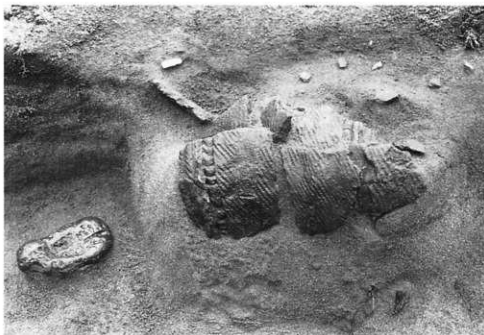


埋 設 土 器 (第29トレンチ)



台石集中跡 (S-1)

遺物の出土状況 (1)



第Ⅱ群土器出土状況（第14トレンチ）

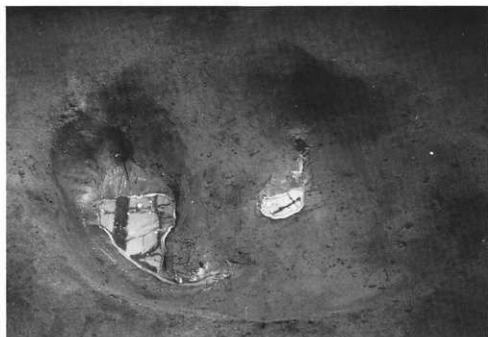


第Ⅱ群土器出土状況（第14トレンチ）

遺物の出土状況（2）



土 壙 (第7トレンチ P-1)



土 壙 (第34トレンチ P-2)

遺 構 の 状 況 (3)

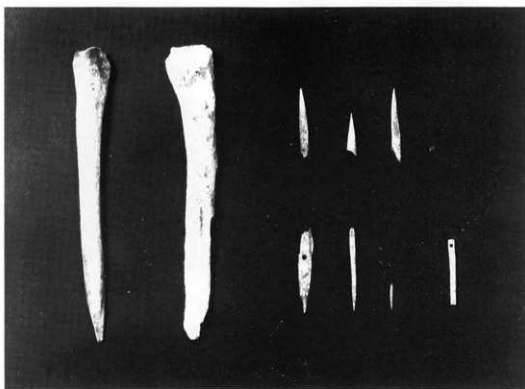


溝状遺構状況 (第14トレンチ)



溝状遺構状況 (第19トレンチ)

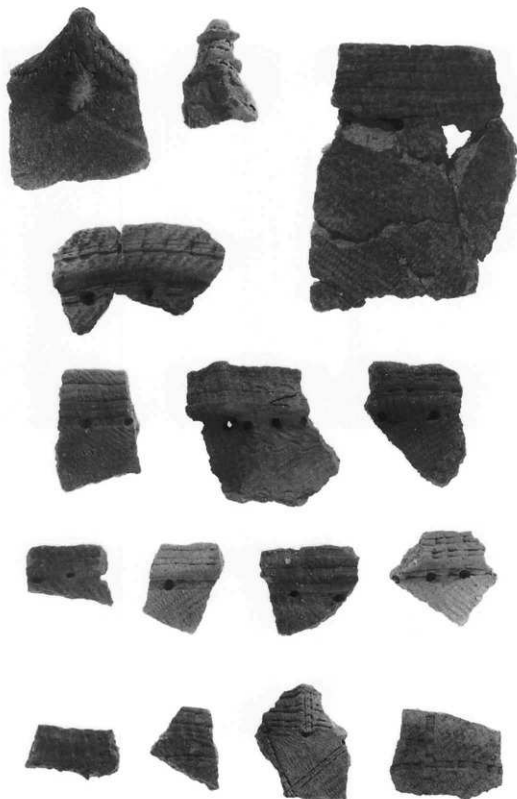
遺構の状況 (4)



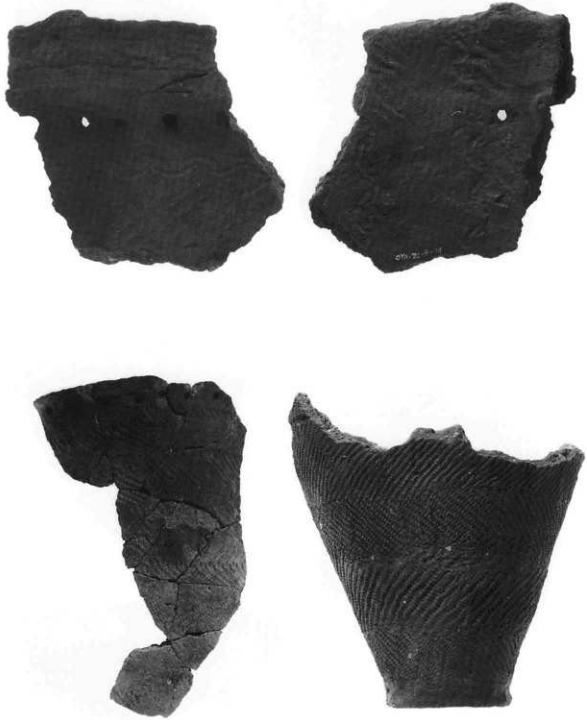
骨 角 器



貝塚出土の遺物 (SM-1)



包含層出土の遺物（第 I・II 群土器）



包含層出土の遺物（Ⅱ群土器）



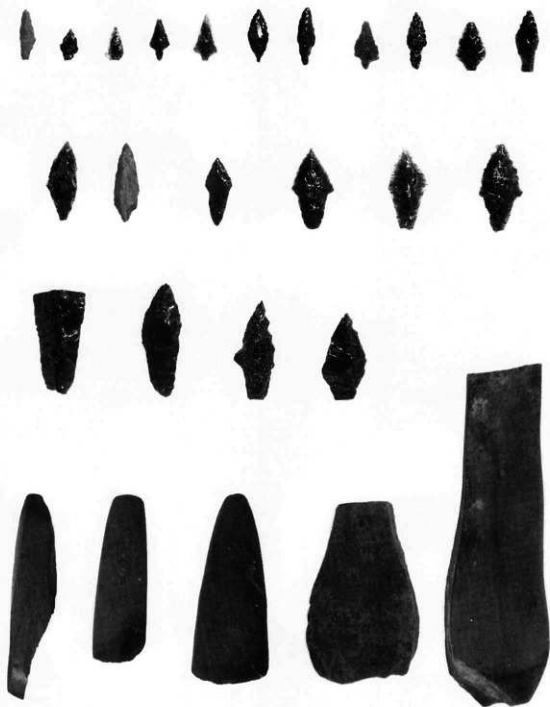
包含層出土の遺物（Ⅱ・Ⅲ群土器）



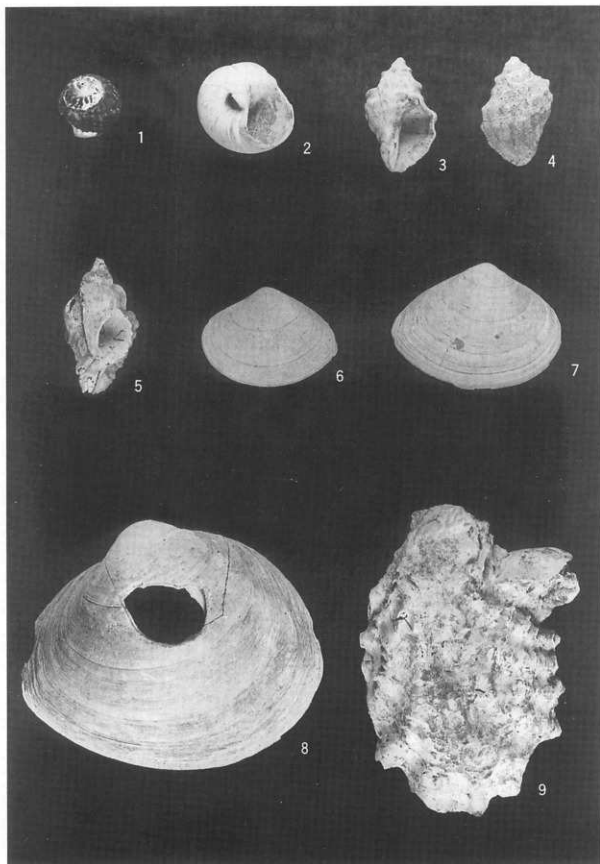
包含層および表土出土の土器（Ⅲ・Ⅳ群土器）



包含層および表土出土の土器 (IV・V群土器)

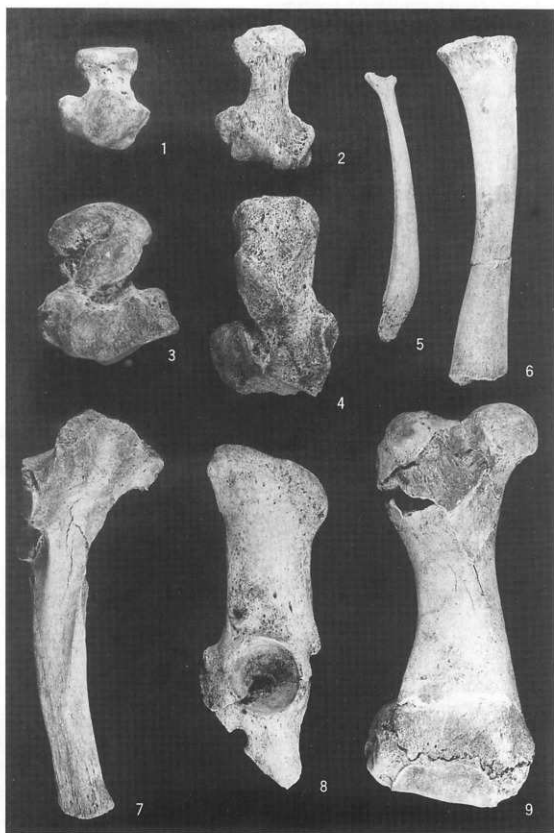


包含層出土の石器 (石鏃・石槍・スクレイパー・石斧・砥石)



図版1 動物遺体1 貝類 約²/₃

1. クボガイ類 2. ツメタガイ 3・4. イボニシ類 5. ヒレガイ 6・7. コタマガイ
 8. ウバガイ 9. マガキ (6・8は左殻、7・9は右殻)



図版 2 動物遺体 2 哺乳類 約 $1/2$

1. アシカ♂距骨 2. アシカ♂踵骨 3. トド♂距骨 4. トド♂踵骨 5. アシカ♂陰莖骨
 6. オットセイ♂脛骨 7. アシカ♂尺骨 8. アシカ♂寛骨 9. トド♂大腿骨
 (1・3・4・7・8は左側、2・6・9は右側)

報告書抄録

ふりがな	よいちちょうおおやちかいづか							
書名	余市町大谷地貝塚							
副書名	遺跡発掘事前総合調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	乾 芳宏							
編集機関	北海道余市町教育委員会							
所在地	〒046-0015 北海道余市郡余市町朝日町26番地 Ⅷ0135(21)2111							
発行年月日	西暦1998年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
大谷地貝塚遺跡	北海道余市郡余市町登町64他	01408	D-19-14	43° 11' 9"	140° 49' 50"	1997.5.12 } 1997.7.31 1997.11.1 } 1997.11.30	1,119 m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大谷地貝塚遺跡	貝塚 包蔵地	縄文時代 中期 後期 晩期	住居跡 土壇 貝塚	縄文土器 石器 骨角器 自然遺物		貝塚とともに住居跡も発見されることから、この一帯の生活環境を知ることができる		

余市町大谷地貝塚

遺跡発掘事前総合調査報告書

発行 余市町教育委員会
〒046-0015
北海道余市郡余市町朝日町26番地
発行日 1998(平成10)年3月25日
印刷 株式会社 おおはし
